魔王の家の村娘A

ごぼふ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔王の家の村娘Ａ

【Ｎコード】
Ｎ６１９３Ｚ

【作者名】
ごぼふ

【あらすじ】
現代日本に住む自称魔王の兄と、その妹の元に召喚されたのは、剣も魔法も使えないごく普通の村娘と小さなドラゴンだった。
逆召喚モノのラブコメファンタジー。
※自ＨＰで掲載したものを、加筆修正したものです。

VS穴

それはクマル暦六百九十三年、八番目の月の事であった。
世界の端で第二十九番目の魔王が世界征服を開始し、人類と魔物の戦いが始まろうとしているそんな情勢の中。
その反対側の小さな村、アテューンのはずれの森。
アン＝ノンマルトンは月明かりの下、頭を垂れトボトボと歩いていた。
彼女がそうして歩くたび、稲穂のようなお下げもゆらゆらと揺れる。
それに合わせ、蛍のような緑色の燐光が大気の中をふわふわと踊った。
魔力の粒、ラーナの光だ。見たくなくとも入ってくるその光を、未だに涙溢れる瞳に映したアンの心もまた、ふわふわゆらゆらと定まらずに揺れていた。
同じ思考をぐるぐると繰り返す頭の重さに引かれるように、足が前に進む。
彼女が、彼女の足が向かっているのは、アンが住んでいる村の麓にある小さな湖だった。
ラーナの混成率が高い、その清らかな水に足を浸すと、自らの悩みや悲しみがスゥっと引くような気がしてくるのだ。
「ぐず……」
鼻をすすり、瞳に溜まった涙を服の袖に押し付けると、アンは再び前を向いた。
そして、そこで彼女は前方に黒い塊が落ちている事に気づいた。
ラーナの光で輪郭がぼんやりと映し出されているが、彼女の膝下ほどまでの大きさの、ハリネズミのようにツンツンと逆立ったシルエットを持つそれが何なのか、アンには察しがつかない。
鈍った頭で、彼女は一歩、二歩とそれに近づいた。

すると、突如それがギョロリと目を開けた。
そう、それは生き物だったのだ。
それがトカゲか口ばしの無い鳥のような口と、皮膜の張った翼を広げた所で、彼女はその正体にようやく気づいた。
ドラゴン……存在を確認されている魔物の中でも最強と名高い存在だ。
これは子竜のようだが、それでも熟練の騎士数十人を屠る力があると、アンは聞いた事がある。
その証拠とでも言うように、こんなに小さな体なのに、その金色の瞳に映されただけで体が竦む。
「ヒッ」
彼女が短い悲鳴を上げ一歩下がると、竜はそれを合図にアンへと飛び掛ってきた。
嫌だ、何故自分がこんな目に。理不尽だ。生まれた時からずっと。自分の人生は理不尽な事ばかりだ。誰か、誰か助けて。
アンは呪い、恨んだ。そして願った。
その瞬間、彼女の足元から、漂うラーナとは別の、強いオレンジの光が発せられる。
足元の感覚が消えうせ、彼女は引かれるまま地面に開いた穴へ、落ちた。

VS異世界

「きゃっ」
「ぶふごぉ！」
着地はすぐだった。
体が落下した感覚がしたかと思えば、すぐに何者かの呻きが聞こえ、下に落ちていたはずの体が、今度は前方へと落ちた。
「え？　え？」
自分の身に何が起こったか、彼女にはまるで理解ができない。
四つんばいのまま顔を上げると、そこには落ちる直前に見た、オレンジ色の光を発する穴があった。
穴。確かにそれは穴だった。彼女は初め、それを絵画に穿たれた穴だと認識した。
しかし、よく見れば違う。彼女が絵画かと思ったその背景は現実のものであり、穴は何も無い中空を当たり前のように穿っていた。
「魔法……？」
きっとそうだ。目にした事はないが、彼女のような普通の村娘が理解できない現象は、大抵魔法なのだ。
そうか。自分は誰かの魔法で、咄嗟にあのドラゴンから助けられたのだ。
彼女の中で辻褄が合い、アンは左右を見回した。
この部屋に自分を助けてくれた魔法使いがいるはずだ。
そうして、ある程度落ち着いた頭で周囲を見回してみると、そこはとても奇妙な空間だった。
草を細かく編んだかのような床。正面は木枠に薄い紙を貼り付けたような壁。
部屋の反対側には、派手な模様の毛布の上に板が乗っている。
テーブルクロス？　いやそれならば天板は布の下にあるべきだし、あんな厚手の毛布を使う必要は無い。それに随分と背が低い。

彼女に理解できるのは、床に白い線で書かれた魔法陣と、その丸い外周に置かれた蝋燭だけだ。
その上に、件のオレンジ色の穴が浮かんでいる。
やはりこれは魔法の儀式の痕跡のようだ。
しかし肝心の魔法使いが……思いついて、彼女は後ろを振り返った。
「ひゃっ」
すると、そこには黒いマントを羽織った少女がいた。
十を超えるか超えないかの歳頃であり、振り返ったアンに対し、両手を掲げた姿勢でぽかんと口を開けている。
とても高位の魔法使いとは思えない。しかしクマル国の十三代皇帝は、このぐらいの年でいかなる魔法も修めていたと聞いた事がある。
そうだ、魔法使いに年齢など関係ないのだ。
そう合点したアンは立ち上がり、振り向いてその幼い魔法使いに礼を言った。
「あ、ありがとうございます！　貴方が魔法で私を助けてくれたんですね！？」
「ふぎゃ！」
するとどこからか、踏み付けられにじられた猫のような叫び声が聞こえた。
「……使い魔？」
「違うわぁ！」
叫び声と共に、地面が盛り上がる。
アンが尻餅をつくと共に、地面、もとい彼女に踏みつけにされていた人物が立ち上がった。
「ヒップアタックから上四方固め後即スタンプとはどういう了見だこの異世界人！」
アンに指をつきつけ叫ぶ相手は、彼女と同年代の男だった。
奥にいる少女と同じように黒マントを身につけており、どことな

く顔も彼女に似ている。
「ど、どなたですか？」
「どなたですかだと！？　まずお前から名乗れ！」
狼狽したアンが尋ねると、男は激昂した様子ながらもっともな事を言った。
「え、あ、わ、私はアン＝ノンマルトンです」
「普通な名前だな！　異世界人のくせに！」
勢いに押された形でアンが名乗ると、初対面のはずの男が失礼な事を吐き捨てる。
その言葉が、彼女の心に火をつけた。興奮しながら、思わず言い返す。
「ふふふふ普通ってなんですか！？　じゃぁ貴方はどんな名前だっていうんですか！？」
「平平良良」
「ヘイヘイヨイヨイ？」
「違うわ！　それでヒラタイラ良って読むんだよ！　漢字も読めないのかよ最近の異世界人は……」
また何か叫びかけて、男の言葉がぴたりと止まる。
コホンと咳払いをし。
「それでヒラタイラリョウと読むのだ。教養のない異世界人め」
と罵倒しなおした。罵倒には変わりない。
そんな事を言われても、男は確かに先程ヘイヘイと自分で楽しそうに名乗ったのだ。
それを別の読み方で読めとはどういうことだ。
アンは眉間に皺を寄せた。
男も何か違和感を覚えたようで、首を捻っている。
すると男の後ろにいた小さい方の少女が男の方を叩いた。
「なんか異世界移動ゲートをくぐると現地の言葉が分かるようになるけど、たまに誤翻訳するって書いてあるよお兄ちゃん」
手に持った分厚い本を指差し、男に何事か説明している。。

「えーっと」
「あ、私は平平良舞。この男の人の妹」
「はぁ、初めまして。平たいラブさん」
「……うん、翻訳に関してはかなりダメみたいだね。私の事はマイって呼んでね。えーと、アンさん」
相変わらず事態が飲み込めずに曖昧な返事をするアンに、少女がため息をつく。
「くそ、ポンコツ魔道書め。通りで安いはずだ」
男、ヒラタイラリョウが魔道書とやらを、妹、舞から奪い取り床に叩きつける。
「でも異世界から召喚は出来たんだから成功なんじゃない？」
それを舞がなだめた。
先程から彼らが頻繁に出している単語、それがずっとアンには気になっていた。
彼女はついに勇気を出し、彼らに質問をした。
「あ、あの、異世界ってなんですか？」
「だから読んで字の如く、異なる世界という意味だ。そのぐらいは流石に翻訳されているだろう？」
良がバカにしたように肩をすくめた。この、異世界？　においても、そういう仕草は共通らしい。
「要するに、お姉ちゃんの居た場所の常識とか法則とかがまるで通用しない遠い場所ってことね。ちなみにここは地球の日本って国だよ」
それをフォローするかのように、舞が補足する。
よくは分からないが、とにかく自分は一瞬にして、遠い場所へと連れて来られてしまったらしい。
それだけを認識すると、アンは叫んだ。
「そ、その、困ります！」
「困る？」
「だ、だって、明日も朝食の準備をしなきゃいけないし、買い物も

あるし、家族だって心配……」
そう言い募り、アンは途中で言葉を詰まらせてしまう。
頭の中に、今夜の出来事がフラッシュバックした。
「……心配するな。俺は別にお前のような一般異世界市民を呼び出すためにこんな儀式をしたわけではない」
そんな彼女をどう思ったのか。良は後ろ頭を掻きながらそう告げる。
もしかして彼は、自分を慰めているつもりなのだろうか。アンの意識が、追憶からそんな思考に引き戻される。
それから、彼はニヤリと笑って黄昏色の穴へと近づいた。
「俺様が華々しくデビューする為にこのゲートを開いたのだ」
「ダ、ダメです！」
そこで、彼に例を言うべきか迷っていたアンはようやく我に返った。
良はそこをくぐろうとしているが、その先には……。
「ダメ？」
彼女の言葉に振り向いた良の脇の下辺りから、黒いモノがにゅっと顔を出した。
それは先程アンが襲われた生き物。小さなドラゴンの頭であった。
「ドラゴンが……出たー！」
「うおおおお！？」
それに気づいた良は、咄嗟の行動だろうがドラゴンの頭を脇の下に抱え込む。
ドラゴンが嫌がり首を振ると、それだけで彼の体が浮き上がった。
「お、お兄ちゃん！」
「な、な、なんだこいつぅぅ！？」
良が両手で竜の首に掴まり、上下に跳ねながら叫ぶ。
「だからドラゴンですよドラゴン！」
「ドラゴン、って、あの、火とか、吐く、奴、か！」
「そうですよ、火とか、ひぃぃぃぃ！？」

アンの言葉が終わるより早く、ドラゴンは口を開きそこから何か飛ばした。
それは舞のマントをかすめ、さらに床をも貫通する。
刺激臭が鼻を突いた。
「酸か！？」
良が叫んだその通り、それは高濃度の酸だった。しかしそのあまりの速度に、アンには空間が削れたようにしか見えない。
「ぬおおお！？」
アンが壁に気を取られている間に、良の更なる叫びが響く。
そちらを見ると、ゲートを飛び出した子竜の体が宙を浮いていた。
正面へとスゥっと飛び出したかと思えば、重力に引かれて落ちる。
自分もあんな風に出てきたのかしら。現実から逃避しかけたアンの頭がそんな事をぼんやりと考える。
「のおおおおお！」
落下した子竜が、ふるふると頭を振る。その度に良が左右へと振り回された。
やがて、子竜の瞳がはっきりとこちらを捉える。
「逃げろ！」
良が叫ぶが、アンも舞もすくんで動けない。
子竜が再び口を開けた。
「くそ、こうなったら！」
良が子竜の首に回していた手を片方放し、頭上に掲げる。
それが背後にあるオレンジの光に照らされ、一瞬輝いて見えた。
そして、振り下ろされる男の手。
それが子竜を――。
「おー、よーしよしよしよし」
撫で始めた。それも凄い勢いで。
「そんなこふぉ！」
している場合かと、叫びかけたアンの口を後ろから舞が塞いだ。
「お、お兄ちゃんに任せて」

そんな悠長な。自分が口を塞がれている今にも、子竜は口から酸を吐こうとしているのだ。
舞の突飛な行動に驚き、いつの間にか体も動くようになっている。
アンが慌てて逃げようとすると。
「キュオオオオ！」
子竜が叫んだ。顎を上げ、背筋をぴんと伸ばす。
更に良がその背中を撫でていくと、今度はくたりと力を抜き、彼に体を預けはじめたではないか。
その顔はドラゴンなど初めて見たアンでも分かるほど弛緩しきり、良が首を掻いてやると、子竜のほうからそこを擦り付けている。
「相変わらず、お兄ちゃんのナデナデはすごい……」
「ぷはっ、な、なでなで？」
舞が自分の口を開放したのでアンが聞き返すと、少女はうんと真剣な顔で頷いた。
「そう、お兄ちゃんのナデナデは特別なの」
「と、特別って……？」
「あれを受けたが最後。どんな生き物も抗えなくなってしまうの。誰彼構わず飛び掛って皆に恐れられていた三丁目の猛犬ペロだって、お兄ちゃんになでられた途端骨抜きになって、今では飼い主に撫でられても『ご主人様は好きだけど、でも私あの男の指が忘れられないの……』みたいな顔をするようになってしまって……」
「あ、あれは、魔法なんですか？」
しみじみと語る舞を遮り、アンは彼女に問うた。
ドラゴンと言えば最強の魔物であり、いくら獰猛だろうと犬と比べるべくもない。
人間に屈するなど有り得ない生き物のはずだ。
それが、今は気持ち良さそうに目を閉じ、口の端から酸の涎をジュウジュウとこぼしている。
「ううん、私達は魔法なんて使えないよ」
「で、でも……私を呼び出したじゃないですか」

「あれもいっぱい準備して、色々用意して、魔道書の通りにやって偶然できただけだから」
「そ、そうなんですか」
それでも魔法は魔法じゃないの？　とアンは思うのだが、この場所とアンのいた所では常識が違うのだと言われたこともあって、深くつっこむ事が出来ない。
「ようし、良い子だ。流石異世界最強生物。良い毛並みではないか。ほれ、首をあげろ」
良が言うように、よく見ればそのドラゴンは短い毛が体を覆っており、皮膚は目と同じく金色をしていた。
良が指示すると、子竜は言われた通り首を上げた。彼が両側から首の付け根辺りを揉んでやると、首を伸ばしプルプルと震える。
ドラゴンは賢い種族で人語も解すると聞いたことがあるが、それに従うなどと言う話は聞いたことがない。
完全に、ドラゴンを手なずけている。
そんな事が出来る人間など、アンは知らない。
いや、人間以外なら、ただ一人だけそんな事をできる存在に、彼女は思い当たった。
「……魔王」
世界で唯一人……いや、正確には人間ではないが。そして倒されても倒されても現れるので単体でもないが、ドラゴンが従う存在と言えば魔物の長、魔王しかあり得ない。
いやしかし、彼が魔王？　まさか、自分を助けてくれた人がそんな事……。
「さぁて、俺様の技術が異世界に通じる事は分かったし、早速征服しにいくかー」
「魔王ーーー！！」
しかし葛藤するアンの思いは、あっさりと裏切られた。
「わっはっは、その通り！　俺は貴様らの世界を支配する魔王だ！」
指を突きつけるアンに対し、良は胸を張り高らかに宣言する。

どうしよう、自分は本当にこれから世界征服をしに行く魔王に出会ってしまったのだ。
「ようし、とにかく異世界へワープだ！　お前も戻してやるから感謝しろ！」
勝手な事を言いながら、魔王は子竜の背中をポンポンと叩いた。
子竜が名残惜しそうに立ち上がり、彼を見上げる。尻尾など左右に揺れていたりする。
その様子に満足げに笑い、男がくるりとゲートに向き合った。
何とか彼の侵攻を阻止しなければ。今は既に別の魔王が世界侵略を始めているのだ。
それなのに更に魔王が増えてしまっては、本当に人類は支配されかねない。
何とかしなければ、アンの頭がそんな思いで埋め尽くされる。そして気づくと彼女は。
「えーい！」
子竜の尻尾を掴み、その体を魔王（仮）の頭に叩きつけていた。
「クケー！」
「ギャー！」
「お、お兄ちゃーーーん！！」
三重の悲鳴が響き、魔王がバレリーナのように回転しながら異世界への穴をかすめ、周りに立ててあった蝋燭につっこむ。
蝋燭が盛大に音を立て倒れ、魔王のマントに引火し、彼は痛みの為か火を消す為かゴロゴロと転がる。
そのおかげで火は燃え広がらず、床を転々と焦がすだけで消火された。
「はぁ、はぁ、はぁ」
子竜の尻尾を掴んだまま、荒い息を吐くアン。
パチンという音がし、部屋の中が眩しい光で照らされた。
「いきなり何すんだよ！」
鎮火を確認した良が、寝転んだまま抗議の声を上げる。

それから、「何をするのだ」と何の拘りか言い直した。
一時の衝動から覚め、アンが口を開きかけた時。
パキン。
甲高い音が例の穴から響いた。
全員がそちらに視線を向けると、穴であったはずの場所に氷のような膜が張り、パキンパキンと、そこに次々とひびが入っていく。
「あぁーー！！」
とどめは後ろの少女、魔王の妹、舞の叫びであった。
それに呼応するように、一斉にひびが広がり、ついにはバキィン！　と一際高い音を立て、欠片を撒き散らしながら砕け散った。
「うひゃぁぁぁ！」
降り注ぐそれを避けようと、奇声を上げながら転げまわる魔王――良だが、砕け散った欠片は地面につく前にスゥっと消滅した。
「あぁーーーー！　異世界ゲートがー！」
そして良の頭上には、もはやあのオレンジ色のゲートとやらはない。
明かりのついた、酸と焦げた匂いが充満する部屋に魔法陣だけが残されている。
「ななななんてことをしやがる！　しやがりますのだ！　するのだ！」
良が立ち上がり、何度も同じ言葉を言い直しながらアンに詰め寄る。
「だ、だって貴方が私達の世界を滅ぼすっていうから」
「滅ぼすのではない支配だ！　というかどうしてくれるのだ！　材料を集めなおすにはまた時間と費用が……」
「し、知らないですよそんな事！」
まくし立てる良の剣幕に耐え切れず、アンは手に持ったもので己の身を庇う。
そして彼女が手に持っていたものとは。
「シギャーーーーーー！！」

こんな事は生まれて初めてだったのか。鈍器扱いをされた後、今まで放心していた子竜であった。
子竜は大声を上げ口から酸を発射した。
首を捻り、それを間一髪で良が避ける。
「うおおお、せっかく懐柔したのにこのバカ者が！　お前ちょっと抑えてろ！　バカ、こっちに口向けんじゃねぇよ！」
「え、え、え、でも今すごい暴れてて！　何とかしてくださーい！」
「誰のせいでこうなったと思ってる！？」
「お、お兄ちゃん、これ以上家を壊したらママが……！」
「言ってる場合かー！」
こうして、西暦二千十年。
アン＝ノンマルトンは異世界の魔王の元へと召喚された。

VS文明

「で、どうしてくれるのだ」
穴が開き、床が焦げ散々になった和室……という場所から、アンは男、平平良良に連れられ階段を降り、革張りのソファーのあるリビングらしき場所へと案内された。
テーブルを挟んで向かい側に座った良が、開口一番に言ったのがこのセリフである。
「そ、その、殴った事はごめんなさいですけど、やっぱり支配とか征服とかは良くないと思います」
「一般人らしい画一的な意見だな。そもそも世界というのは既に誰かしらに支配されているのだ。だったらちょっとぐらい俺が支配してもかまわんだろう」
「一般人に殴られて転げまわる人の支配はちょっと……」
「殴った奴が言うな！」
良が叫ぶと、その膝の上に乗っていた子竜がびくりと首を起こす。
先程の二の舞を恐れてか。彼は子竜の背中を慌てて撫でる。
「はーい、お兄ちゃんとえーっと、アンさんにも麦茶とお菓子どうぞ」
そこへ彼の妹、舞が盆の上に飲み物と紙に包まれた物を乗せてやってきた。
彼女は兄の隣に座ると、包み紙をはずして中の物を口に入れる。
アンもそれを真似してみると、口に入れた途端甘い味が広がった。
「おまんじゅうで大丈夫だった？」
「ふぁ、はふぃ」
舞に問われ、アンはコクコクと頷く。なるほどこれはおまんじゅうと言うのか、美味しい、が、彼女の口では、一口で食べるには大きすぎる。
もしかして異世界の人は自分より口が大きいのかしらん。などと

考えながらアンはそれを何とか嚥下する。
「……妹の真似をして一口で食う必要は無いぞ。というか麦茶飲め」
「あ、ありがとうございます」
見かねたという様子の良が、恐らくガラスで作られている容器に入った褐色の飲み物をアンに差し出す。
それを受け取って飲み干すと、胸のつかえも取れた。味も悪くない。
「クーラーつけるね」
言って、舞が手に持った何かを操作すると、ピッと音が鳴りどこからか涼しい風が舞い降りてきた。
なんだろうこれ。アンがキョロキョロと周りを見回していると、良がコホンと咳払いをした。
慌てて視線を戻すと、彼はじっとこちらを見ている。
どうやら先程の質問の答えをずっと待っていたらしい。
「えーと、それで私どうすればいいんでしょう？」
「俺に聞くな！」
落ち着いた所で尋ねると、良に再び怒鳴り返された。
怒鳴りながらも子竜を撫でているのだから、器用なものだ。
「で、でも私、この世界の勝手という物を知らないので……。ここってどんな世界なんですか？」
その質問に、向かいに座った兄妹は顔を見合わせる。
私何か変な事を聞いたかしら。などと彼女が困っていると。
「えーと、とりあえずこういうドラゴンとかはいないね」
「あと魔法もないな」
「エルフとかドワーフとかもいないね」
交互にあれが無いこれが無いと挙げていく二人。
「勇者も魔王もいない」
「魔王はいるじゃないですか」
良の言葉にアンがツッコミを入れると、彼は眉間に皺を寄せ、難しい顔をした。

「俺は……まだ正式には魔王ではないというか、まぁいずれそうなる人材だが……」
「魔王見習いという訳ですか」
「一気に威厳がなくなるから、その呼び方はやめろ」
言葉を濁す良に助け舟を出すつもりでアンが尋ねると、彼の顔は更に渋いものとなった。
呼び方はともかく、認識としてはそんなところで良いのだろう。アンはそうあたりをつける。
「とりあえず、良さんってこの世界を支配してるわけじゃないんですね」
「こんなつまらん世界、支配する価値もない」
この世界が自分に殴り飛ばされるような人間が支配する世界ではなくて良かった。アンがほっと息を吐くと、良はつまらなそうにそっぽを向いて吐き捨てた。
「そういえば、先程から無い無いって言ってましたね」
「あぁ、何も無い空虚な世界だ」
ついには子供のように口を尖らせる良。彼はこの世界が嫌いなのかしら。そう考えると、アンの胸に言いようのない感情が芽生えた。
世界を、嫌う。今まで一つの世界、その端の小さな集落しか知らなかった彼女には、無かった感覚だ。
「おまんじゅうはあるじゃないですか」
「おまんじゅうがあってもなぁ……」
アンがその解析不能な気持ちに戸惑いながらフォローすると、良は難しい顔をしたままではあったが、とりあえずこちらを向く。
「それに、この部屋にだって私が知らないものが沢山ありますし。……あ、そうだ。私この世界のことが知りたいです！」
「俺が聞いたのは、どうしたいかではなくどうするかだ！」
「あぁ、そういえばそんなお話でしたね」
すっかり忘れていたアンがあっけらかんと返すと、良はがっくりと肩を落とした。

しかしどうするのかと言われても、そもそもの話として、とアンは考える。
「えーと、良さんは私をどうしたいんですか？」
普通はこういう場合、選択権を持つのは相手側だろう。ここは彼の世界であり、アンは加害者であり、しかも良は魔王のタマゴなのだ。
魔王相手に加害者になった自分に、アンは今更ながら呆れてしまう。
「え、俺？」
だが肝心の魔王はといえば、何やらとても間の抜けた反応を示す。
「そうです。こう、私をどうしたいとか。どうしてやりたいとか」
言いながら、アンが身を乗り出し机に手をつくと、魔王良は慌てて身を引いた。
「ば、バッカ！　若い女の子が何言ってんだよ！」
「え？　私何か変な事言いました？」
「ごめんねアンさん。お兄ちゃんって人の十倍純情なの」
「は、はぁ」
異界ならではのやり取りだろうか。アンにはもはや恒例となった生返事しか出来ない。
「バカ言うな！　魔王たるもの一辺たりとも汚れていない心を持つものか！　えーと、お前にさせたいことだな！　させたいこと……」
それに対して何の対抗心を燃やしてか。良は高らかに宣言すると、こめかみに手を当て考え始めた。
もぐもぐと新しい饅頭を摘みつつ、彼の答えを待つアン。
それから、アンが更にもう一個食べようか迷っている間に、良はアンに指をびっと向けた。
「そーだ召使いだ！　お前は俺の召使いになるのだ！」
「お兄ちゃん、考えた割に発想が小学生並み」
隣の舞が、半眼で彼に呟く。
「召使いって、具体的には何をすればいいんでしょう」

「この家を全部掃除させるし、俺達の料理も毎食作ってもらう！」
「それでだけ良いんですか？」
「え、あぁあぁ……あー、えーと、あとゲームのレベル上げもやらせる」
「お兄ちゃん……」
アンにはそれがどんな行為かは分からないが、良の妹が彼を哀れみの目で見ている以上、大した事ではあるまい。
「私、魔王さんのする事だから儀式の生贄にされちゃうとかそういう事を考えてました」
「……それを想定していて、よく俺に判断を委ねられるな」
「えへへ」
「褒められてないからね、アンさん」
「こいつ、思いの外バカだぞ」
照れ笑いを浮かべるアンに、兄妹が揃って渋い顔になる。
子竜までが短く鼻息を鳴らした。
召使い……。アンはその言葉を反芻すると共に天井を見上げた。
そこには、先程ドラゴンが酸であけた穴が開いている。
「そういえば、この家にはお二人で住んでいるんですか？」
彼女の世界の基準では、良ぐらいの年になると自立する者も珍しくは無い。だが、このような一軒家を持つものは稀である。一山当てた冒険者ぐらいのものだろう。
「……今はそうだな」
渋面のまま、良がそう答えた。
「やっぱりお父様も魔王で？」
質問を重ねると、その渋面が濃くなり、汁でも出そうな表情になる。
「極悪な人間ではあるな。自分の下半身さえ支配できないが」
「へぇ……」
やはり意味はよくわからない。舞が言っていた翻訳ミスとやらの所為かもしれないが、良の横を見ると彼女も浮かない顔をしている

ので、アンはそれ以上の追求をやめた。
「そんなことより」
良がため息を吐くと、あからさまに話を変えようとする。
「なんでしょう？」
やはりあまり触れないほうが良い話題のようだ。そう考え、アンは彼の話に乗ることにした。
「お前、シャワーを浴びて来い」
「え！？」
「えぇ！？」
良の言葉に、女性二人が揃って声を上げる。
「お兄ちゃん！　召使いなんていって目的はやっぱり……」
「ば、違っ！　そんな意味じゃねぇ！」
兄妹が目の前で騒ぎ出す。子竜がうるさそうにそっぽを向いた。
「その、目が腫れてるから……」
「あぁ……」
「あ、あれ！？」
良がボソリと漏らすと、舞がアンの顔を見、頷く。
その言葉に、アンは慌てて目元を拭った。
どうしよう、きっとここに来る前ずっと泣いていた所為だ。
そんな顔でさっきまでずっと話していただなんて。恥ずかしくなり、ぐしぐしとこするが、それで直るはずもない。
「べ、別にそんなに目立つ訳じゃない。それにさっきも散々暴れたからな。……風呂の使い方は分かるか？」
「え、シャワーって、お風呂なんですか？」
「お前らの世界にはシャワーも無いのか」
「え、あ、はい。お風呂も普通はお金持ちの家か公衆浴場しかありません」
「……お前はしばらく独りにできそうにないな」
シャワーを知らないなら、さっき驚いていたのは何なのだ。愚痴ってから、良は妹の頭をぽんと叩いた。

「舞、入れてやれ」
「……はーい」
妙な間があって、舞が返事と共に立ち上がる。
何だろうと気になりはしたが、それよりもアンには意外な事があった。
「親切なんですね、良さんって」
初対面の時はずっと怒っている怖い魔王だと思っていたが、あんな事をした彼女をひどい目にあわせる気もないようだし、涙の痕に気づいてお風呂まで勧めてくれる。
この人は本当は、良い人なんじゃないかしら。などと考え、アンが彼に礼を言うと。
「お、俺は、親切なんかじゃない！」
――急に、良が立ち上がり叫んだ。子竜が慌ててテーブルの上に着地する。
先程から怒ってばかりの良だったが、何か様子が違う。
拳を握った彼の表情は、怒りと言うより後悔、もしくは自己嫌悪のようなものに溢れている。
何か悪い事を言ったかしら。彼の豹変具合にアンは困惑した。
良の方も言ってからハッとした様子で。
「その、召使いが汚れていると、俺の教育が問われるだろう」
と付け足した。
こちら側に回ってきた舞が、良の様子を痛ましそうに見てから、アンに微笑む。
「お兄ちゃんは仮免気味にも魔王なんだから、親切なんて言っちゃダメだよ。こう言ってあげなきゃ」
そうして、彼女はアンにごにょごにょと耳打ちをした。
その内容を聞き、よくは分からないまま頷き、アンはその言葉を口にする。
「安いツンデレですね、良さんって」
「誰が安いツンデレかーー！！」

また怒られた。しかしその怒声に、先程のような内側に向けられたものは無い。

「ええい、良いから早く風呂に入ってこんか！」

それを確認したアンは、手を引く舞に連れられ、風呂場へと向かった。

その胸には、妙な安堵があった。

VSサービスシーン

脱衣所だと告げられた場所で、アンはおずおずと服を脱いでいく。
ずっと風呂と言えば公衆浴場であった彼女なので、同性に裸を見られる事など慣れたものだと思っていた。
だが、まったく知らない人間でもない、かと言ってそれほど親しいとも言えない人間と個室に入るとなると、やはり緊張した。
そう、この世界の風呂は個室なのだ。体を洗う場所と浴槽。それぞれが人間二人分ほどのスペースしかない。
「アンさーん？」
一方で舞は体を隠す様子も無く、手に持ったホースから、ジョウロのように細かく分かれた水を出している。
「え、いえ、その……ちょっと待ってくださいね」
言って、彼女は背中を向け、自らのスリップの胸元に指をかけ、その下の体に目をやる。
彼女が躊躇する理由は、もう一つあった。
「大丈夫だって、私よりは大きいから」
「舞さんって、おいくつなんですか？」
「六十六」
「え、舞さんってもしかしてお婆ちゃんなんですか！？」
思わず振り返り、この世界の人間は老けないのか。敬語を使っていて良かった。などとアンがビックリしたり安心したりしていると、舞が違う違うと手を振った。
「あぁ、年ね。年はねー、十一歳だよ」
それから、彼女はそう答え直す。
この世界と、自分のいた世界で年の数え方って一緒なのかしら。
一瞬疑問に思ったアンだが、舞を見る限り十一歳と言われて違和感が無い。
魔法の翻訳のおかげなのかもしれない。結論は出そうにないので

アンは疑問を脇に置いた。先にでた数字についてもだ。
「十一歳なら、これから大きくなるじゃないですか……」
「アンさんはいくつなの？」
「十六です」
「あ、じゃぁお兄ちゃんと一緒だね。それならこれからもっと大きくなるよ」
「でも、私はその……」
「ほら、早く入ろ。風邪引いちゃうよ」
「は、はい」
言いかけたアンだが、舞に急かされ、躊躇いながらもついにスリップとドロワーズを脱ぎ捨てた。
結んでいた髪を解き、そろそろと風呂場に入る。
「すべるから気をつけてねー」
「ど、どうも」
「で、これに座って」
「わかりました」
「お客さん、こういうお店は初めて？」
「はい？」
「ごめん、何でもないの。お兄ちゃんにやったら下品だって怒られたし」
勧められるままに不思議な材質の椅子に座ると、舞が不可解なことを言い出した。
アンが聞き返すと、通じなかったのが不満らしく舞は口を尖らせる。
この世界の定型句か何かだろうか。彼女にはやはりよく分からない。
「お兄さんともこうやって入るんですか？」
「うん、そうだよー。あ、シャワー当てるから冷たかったりしたら言ってね」
返事をしながら、舞がそのスコールのような水をアンの背中に当

てていく。
……温かい。お湯である。これがシャワーだったのか。
彼女達の話では、この世界には魔法が無いらしい。だが、これが魔法でないなら何なのだろう。そう、アンは考えた。
「どうしたの、アンさん」
返事をしないアンを訝しがって、舞が尋ねる。
「いえ、この世界って不思議だなーと思って」
「そうかなー？　そっちの世界のほうがずっと不思議だと思うけど」
「良さんもそう言ってましたね。だからこちらの世界に来ようと思ったんですか？」
「んー、私はそういう訳でもないんだけどねー。あ、目をつぶったほうがいいよ」
言われた通りにすると、髪にシャワーが当たる。
「アンさんって、髪キレイだよねー。あ、全然引っかからないや」
言いながら、舞がアンの髪の梳いていく。
「あ、舞さん？」
「髪、洗ってあげるね。シャンプーが目に染みるから開けちゃダメだよ」
舞はしばらくシャワーと共に指でアンの髪の汚れを落としていく。それから彼女はアンの髪にペタペタと何かを塗り、頭皮を指で揉むようにして広げていった。
アンは他人に髪を触れられる事に多少の抵抗がある性質なのだが、彼女に触られ、なおかつ謎の液体を塗られてもあまり不快ではない。
「うっふっふ、私もマッサージは自信があるんだ。お兄ちゃんには全然かなわないけど」
しかし何故だろう。指自体は心地よいのだが、彼女の笑いからは不穏なものを感じる。
シャワーは温かいというのに、不思議な寒気がアンの背中をゆっくりと上っていった。
そんな彼女に構わず、舞は喋り続ける。

「私の髪、いつもお兄ちゃんに洗ってもらってるんだよ。お兄ちゃんの指はねー。すんごいの。気持ち良くて、いっつもぼうっとしてるうちに終わっちゃうんだ……。でも、私の髪には終わった後もぼんやりと感触が残ってて、それが時間が経つと引いていっちゃうんだけど、アルデンテのパスタみたいに、髪一本一本の芯に熱さが燻ってててね。クセになっちゃうの」

シャンプーとやらは、どうやら泡のようだ。それのおかげで上手く喋ることができない。

それができたとして、彼女のトークに口を挟めたかは分からないが。

「会ったばっかりのアンさんに言うのもどうかと思うんだけど。私ね、今迷ってるの。何に迷ってるのかっていうと、大人になるか子供のままでいるか。子供のままでいたほうがお兄ちゃんにはいっぱい撫でてもらえると思うんだけど、子供のままじゃお兄ちゃんはきっと離れて行っちゃうし、きっと大人になったらもっと気持ち良いことが待ってると思うんだよね」

彼女の話を聞きながら、アンは何となく理解していた。

ドラゴン、あのプライドと知能の高い種族を一瞬で陥落させる指。それを十一年間受け続ける事の意味を。

シャワーが再びかけられ、シャンプーが洗い流されていく。

前髪を顔に貼り付けたまま、アンは動くことが出来ない。

恐る恐る、ようやく目を開けると、鏡に映った舞がニッコリと笑っていた。

「はい。今の全部ジョーダンね」

「はい！？」

「ごめんね、異世界の人には分かりにくかったよねー」

「じょ、冗談……」

言いながら、今度はタオルに石鹸をこすり付け始める舞。

アンの頭は混乱したままで、彼女の言葉についていけていない。

冗談だったのか。こちらの笑いのツボは本格的に自分達のものと

は違うらしい。
アンが自分でも成分のよく分からない深い息を吐いていると。
「お兄ちゃん。体のほうは洗ってくれなくなっちゃったんだよねー。だからアンさんで憂さ晴らしさせてね」
鏡に映った舞が、タオルを持っていないほうの指をワキワキと動かしていた。
「そ、それも冗談ですよね」
「うふふふふ？」
「イヤーーー！！」
アンの悲鳴が風呂場に響く。
その日、その場所で、アンは魔王より恐ろしい人物を見たのだった。

VS名前

「ただいま戻りましたー……」
アンがふらふらと居間に戻ると、雑誌を読んでいた良が子竜と同時に顔を上げた。
「物凄い悲鳴が聞こえたが、無事か？」
「き、聞こえていたなら助けてくださいよぉ」
「どうせシャンプーでも目に入ったんだろう？　そして俺が何事かと駆けつけると、キャーエッチーとか言って、その顔に桶でも投げつけるつもりだったに違いない。お前のような一般異世界人がやることなど分かりきっているのだ」
そして意味不明なことをつらつらと言う。多分これは冗談ではなく本気で言っているのだろう。もはやそれがどちらであろうが、今のアンにはどうでも良くなっていた。
「あー、良いお湯だったねー。アンお姉ちゃん」
そんな彼女の後ろから舞が現れ、アンに意味深な視線を送る。
「は、はい、舞様……舞ちゃん」
アンは彼女にギクシャクと言葉を返す。まさか年下の同性に、あんな辱めを受けるとは予想していなかった。
良は二人に不審そうな視線を向けてから、まぁいいと咳払いをし。
「で、その格好は何だ」
と、もっと不審そうな目で見た。
「何って、パジャマだよ」
それに対し、舞がさらりと答える。
「へそが出ているではないか」
良に指摘され、アンはまるで雷が落ちたかのように急いでへそを隠した。
「私のじゃサイズが合わないんだもん」
アンが着ている服は、パジャマというらしい。

この世界の標準的な寝具だと舞は言っており、ゆったりと作られている為アンでも着る事はできるのだが、如何せん手足や臍の丈が足りない。
舞がこれで良いのだというので従ったが、やはりこの着こなしは間違っているようだ。
「……風邪引くぞ。腹巻でも出してやれ」
「りょうかーい」
返事をし、舞は二階へと上がっていった。
「しんせ……ツンデレにどうも」
「だからその奇怪な日本語はやめろ」
親切、と言いかけてアンが言いなおすと、良は辟易とした顔で返した。
彼は手に持ったおまんじゅうを、膝の上にいる子竜にやっている。
「食べさせちゃって良いんですか？」
「……異世界最強生物が、まさか饅頭詰まらせて死ぬなんて事はあるまい」
それでも少しは不安に思ったのか、彼はそれを千切って与えはじめた。
何となくそれを微笑ましく思いながら、アンは彼の向かいに座る。
「というか、こいつの餌には何をやればいいんだ？」
彼女の表情が気に入らなかったのか。やはり良は憮然とした顔をしながら、アンに問いかける。
「んー、確か何でも食べますよ。牛とか、人間とか」
「人が手を差し出してるときに、不安になるようなことを言うな」
「だって、ドラゴンってそういう生き物なんですもん。普通の人は傍に居たいとすら思いませんよ」
それを平然と飼いならし、飼い犬扱いである。魔王といえど恐れは無いのか。アンもさすがに呆れて、彼にそう言った。
「その割には平気そうだな。一般異世界人代表」
「え？　あぁ、何だかよく分からない事が続いた所為で、感覚が麻

痺してきちゃって」
良に指摘され、アンはようやく自らの矛盾に気づいた。
出会ったときは恐怖で震えが止まらなかったと言うのに、今はこのドラゴンに愛嬌のようなものまで感じ始めている。
先程、風呂場で死ぬより恐ろしい目にあったからだろうか。
それとも。
「私の世界との繋がりって、この子しかいないんですよね」
そうだ、今の自分はまったく知らない世界で、一人ぼっちなのだ。
今更それを意識し、アンは胸の中をじんわりと締め付けられるような感覚を覚えた。
「そ、その、俺は謝らんぞ」
「あ、ごめんなさい。良さんを責めたい訳じゃないんです。あの穴を壊したのは私だし、そもそも助けてもらわなかったら、この子に食べられてましたから。それに……」
あからさまに動揺している良に、アンは慌てて弁明する。
更に出かかった言葉を、彼女は途中で飲み込んだ。
「どうした？」
「い、いえ……」
何となく、彼に対して『それ』を言うのは憚られる。彼女自身それをはっきり断言できる訳ではなかったし、それを言えばきっと、何故と問われるであろうから。
良が押し黙り、アンも口を開けない。気まずい沈黙が降りた。
「ただいまー。あれ、どうしたの？」
そんな空気の中、舞がピンク色の布を持って戻ってきた。
彼女は両者の顔を覗き込むが、良は首を横に振り、アンは曖昧に笑うだけなので、諦めた様子でアンの前に立った。
「アンさん、ばんざーい」
ばんざいという言葉が、アンには何故か両手を上げろという意味だと伝わる。
彼女は言われた通りに両手を上げ、それから舞がニヤリと笑って

いる事に気づき、戦慄した。
が、舞はその伸縮性のある布をアンの頭の上から通し、腹の辺りで止めると何もせずに体を離した。
「期待しちゃった？」
「し、してません！」
ニヤニヤと笑ったまま良の隣に座る舞に、アンは顔を赤くして言い返した。
ワザと先程の風呂の件を連想させたらしい。
良はもちろん訳の分からないといった表情をしている。
恥ずかしくなり、アンはもじもじとその腹巻とやらを弄った。
どうやら編み物のようで、彼女の腹にぴったりとくっついている。
なるほど、確かにこれならお腹を壊さなくて済みそうだ。
この伸び縮みはお婆ちゃんが編んでくれたマフラーと同じ原理かしら。
そう考えた後、祖母の顔を思い出してまた気分が沈みそうになり、アンはプルプルと首を振った。
「さっきから何だ」
不審極まる、といった表情でこちらを見てくる良。
アンは彼に愛想笑いを浮かべながら、何か誤魔化す材料はないかと周囲を見回した。
それから、ふと視線が良の膝の上にいる子竜へと向く。
「あ、名前をつけませんか？」
「名前？」
「そのドラゴンのです。飼うんですよね？」
「まぁ、野に放つ訳にはいかないからな」
問いかけると、良はふふんとシニカルに笑いながら答えた。
「それにこいつは、我が魔王軍の第二の部下だ」
「それって私が第一なんですか？」
「違うわ。お前みたいなファンタジーパンピー略してファンピーは一生召使いだ」

第一はこいつ。と、良は妹の頭に手を置き、ひと撫でした。
あ、舞ちゃん今一瞬凄い顔した。などと確認しつつ、アンは頷いた。
「そうですか……」
安心したような、役立たず扱いには少しガッカリしたような、微妙な気分である。
付随する思い出がまた顔を出しかけて、アンはまた首を左右に振った。
「……それはクセか何かなのか？」
「い、いえ、そうだ。そうじゃないですよ。名前ですよ名前。飼うにしても部下にするにしても名前がないと不便ですよ！」
もはや心配そうな顔になってきた良を誤魔化し、アンは若干大げさに主張する。
その勢いに押され、ぎょっと身を引いてから、良はそれを恥じるようにコホンと咳払いをして彼女に告げた。
「名前ならもう考えてある。クッキー、もしくはキクだ」
「えーっと、由来を聞いても良いですか？」
「こいつ、一見黒いが下に金色の皮膚があるだろう。黒と金だ。だからクロキンとも考えたのだが、それでは安易すぎるのでクッキー。もしくは逆さにして縮めてキクだ」
「異世界の人って、不思議な発想をするんですね」
「いや、お兄ちゃんだけだから。ていうか外見から離れられない時点でどう捻っても安易だと思うよお兄ちゃん」
「う、うるさいわ！　あぁもうキクで決定」
女性陣に代わる代わる言われ、良はヤケクソ気味にそう断言した。
「良いかキク。俺とお前で世界を征服してゆくのだぞ。代わりにお前は我が部下一号に昇格してやる」
言いながら、良は子竜――改めキクを持ち上げ語りかけた。
「あ、ちょっとお兄ちゃんズルい！」
まるで交換条件になっていないとアンは思うのだが、抗議する舞

を見るにそれは重要な部分らしい。
それに対し、キクは短く「くあぁ」と答えた。
もしかしたらキクはもう人間の言葉が分かるのかもしれない。アンはそんな事をぼんやり考える。
「よしよし、良い子だ」
その返事に良は気を良くし、キクを片手で抱きなおしその頭を撫でる。すると、その遠まわしな由来である金色の皮膚が風に揺れる稲穂のように覗いた。
キクが目を細めおとがいを上げると、良は鼻から息を抜きながら頬を緩める。
良が初めて無邪気な笑顔を見せた気がし、アンも釣られて微笑んだ。
「な、何だ」
「いえ、良さんって可愛いなって思って」
「……放り出すぞお前」
「えぇ、褒めたのに！？」
アンが机に手を置き抗議の声を上げると、良は静かにキクを置き、机越しのアンの頭を両手で掴んだ。
「お・前・の・世・界・で・は、可愛いと言われて喜ぶ魔王がいるのか！？」
一語ずつ区切りながら、良が掌底でぐりぐりとアンのこめかみを嬲る。
その顔にはもはや先程までの笑みは無い。
「アンお姉ちゃん良いなぁ」
「良くないですって！　痛い痛い痛い！」
「クエエ」
指を咥えながら羨ましがる舞に叫びながら、アンはその痛みに悶え苦しんだ。
相手の気持ち良いツボが分かるという事は、痛みもより効率的に与えられるという事なのか。

まるで直接押しつぶされているような脳から、そんな言葉を絞り出される。

しかし、そうして騒いでいる内に、彼女の落ち込んだ気持ちはいつの間にか消えていたのだった。

VS朝食

次の日の朝。
「ふぁああ」
「くふぇぇ」
同時に欠伸をしながら、良がキクを抱え階段を降りてくる。
まるでぬいぐるみが無いと眠れない子供みたいですね。
アンは彼にそう言おうかと思ったが、昨夜のこめかみの痛みを思い出し、自重した。
「おはようございます、良さん、キクちゃん」
しかし顔の緩みを抑えることは出来ず、妙な笑顔でアンは一人と一匹に挨拶する羽目になった。
「おはよ……と、お前は何をしているのだ」
寝ぼけ眼のまま普通に挨拶を返しかけた良だったが、魔王の沽券に関わるのか彼は途中でその言葉を飲み込むと、誤魔化すようにアンを睨みながら尋ねた。
「おはようお兄ちゃん。何って、料理だよ」
アンの隣に立つ舞もまた、振り返って彼に説明をする。
彼女らは良より一時間ほど前に起き、顔を洗い朝食の支度を始めていた。
パジャマの上にエプロンをつけ、共にキッチンに並んでいると、自分に妹が出来たようでアンには嬉しかった。
昨日の風呂場での出来事さえなければ、もっとすんなり彼女を妹のように思えたはずなのだが。
「料理って、お前らそんな事できるのか？」
「お兄ちゃん。私にできると思う？」
「おい」
問い返す舞に、良が半眼を向ける。
「あ、私は一応できますよ。酒場で賄いを作ってたこともあります

し」
アンは良を安心させるべくそう告げるが、彼は寝起きの所為だけでは無さそうな目つきの悪さで今度はアンを見る。
「お前が、料理なぁ」
どうも自分は彼にあまり信用されていないらしい。
「食材も大体あちらと一緒でしたし。トマトとか、レタスとか」
良を安心させるため、言いながらアンは、今きざんでいた食材を見せる。
異世界にあっても人間という種族は存在するように、野菜もまた同じものは存在するらしい。
冷蔵庫とやらを開ける際はどんなゲテモノが飛び出すか、アンも戦々恐々としたものだが、取り越し苦労だったようだ。
中身はほぼ彼女の知っている食材ばかりであった。
「あと、この毒フニフニ草とか」
言いながら、アンは底が赤くなっている、彼女の世界でもお馴染みの緑草を良に見せた。
「そりゃほうれん草だ！　そんな素材この世界にはねぇよ！　ていうか毒って名前ついてるじゃねぇか！　何作ろうとしてるんだよ！」
だが、良はアンが掲げた葉を見て怒涛のツッコミをする。
「え、大丈夫ですよ。こうやって苺ジャムを塗れば毒は中和されますから」
「だからそれはフニ何とかじゃねぇ！　何塗ってんだ！？」
そんな、どう見ても毒フニフニ草なのに。
信じられない思いでアンは手元にあるジャム塗れの野菜を見た。
「お兄ちゃん近所迷惑」
「誰の所為だ！？　生のほうれん草にジャム塗った時点でお前もおかしいと思え！」
叫ぶ良の腕から、うるさそうにキクが逃げる。
それを少し意外に感じながら、アンは見つめた。
「はぁ、はぁ、あぁ、あいつも俺にべったりという訳では無いらし

いな。昨日も寝るときはクッションを勝手に裂いて、俺に背を向けて寝た」
「おー……」
息を整えながら、良がアンの疑問を察したらしく答えた。
流石は異世界最強生物。心まであのナデナデに侵されてはいなかったらしい。
自らの世界の最強がこの世界の魔王に屈しなかった事に、アンは妙な感動を覚えた。
「まぁ、今朝はこいつの撫でろという催促で起こされたがな」
……ただ単に気まぐれなだけかもしれない。
本当に、普通の剣では虫刺され程度の傷すら与えられない存在なのになぁ。
感動が無駄になった気がして、アンはため息をついた。
「それより、料理は本当に大丈夫なんだろうな？」
「あ、はい。毒フニフニ草さえ抜けば多分普通のサンドイッチですから」
「アンさん、だからフニフニじゃないって」
良の喉と近所の耳を心配してか。さすがに舞がアンに対してツッコミを入れる。
そうでしたと謝ってから、アンはとりあえず毒……ほうれん草は別の器に入れておく。
それを嫌そうに見てから、良はしかしと話題を変えた。
「あちらでもサンドイッチはあるのだな。もちろん別の名称が翻訳されているのだろうが。もしや由来はサンドイッチ伯爵か？」
「あ、はい。一つ目殺しのサンドイッチ伯爵が、相手を石の壁で押しつぶす魔法をヒントに、この料理はできました」
「エピソードはまるで違うのだな……」
「じゃぁこの具って、つぶれた生き物がモデルなんだね……」
由来を聞いてげんなりしたような顔をする二人。
そういえばそんな理由で、これが嫌いな人もいたっけとアンは思

い出した。
「それが嫌ならこちらのシチューもありますから」
「あ、そうだ。こっちはインスタントのに野菜を入れただけだから、安全だよ」
アンが鍋に入った白いシチューを指し示すと、舞がそう補足する。
あの四角い塊を鍋に入れてかき混ぜるだけでシチューになるというのだから、本当にこの世界の技術は大したものだ。
「安全と評される料理と言うのも、微妙に食いたくなくなるな」
「そんなに不安なら、お兄ちゃんも手伝ってくれれば良いじゃない」
「魔王が料理など、似合わないにも程があるだろう」
そう言って肩をすくめる良。
良いと思うのになぁ、お料理魔王。などとアンが思っている間に、彼は背中を向けてテーブルへと向かってしまった。
しょうがない人、と二人は顔を見合わせ、料理の続きを作ることにした。

それから十分後。
良の横には舞。膝の上にはキク。向かい側にはアンという昨日と同じ配置で、食器を並び終えた彼らは座っていた。
「いただきまーす」
舞がそう言ってサンドイッチに手をつける。良も同じよう口の中でそう挨拶し、それを口に運ぶ。
この世界では、食前に主神レンギ様にお祈りする習慣は無いらしい。
まぁ、神様も流石に異世界までは見ていないだろう。
そうアンは判断し、彼らに倣っていただきますと言ってサンドイッチに手をつけた。
「ど、どうでしょう」
「ん、まぁ普通だな」

「そうですか……」
恐る恐るといった感じでサンドイッチを租借し終えた良に感想を聞くと、特に面白みの無いコメントが返ってきた。
「まぁ、サンドイッチですからそう極端な事にはならないですよね」
「なりかけただろうか」
良がジト目でジャム漬けのほうれん草を見る。
試しに齧ってみると、なんというか草とジャムの味がした。
こんなに似ているのに味がここまで違うとは、不思議なものだ。
アンが文字通り苦々しい経験を積んでいると、舞が口を開いた。
「そういえばお兄ちゃん。重大な問題が発生しました」
「ほう、言ってみろ」
挙手をする舞に、教師のように促す良。この世界でもこういうやり取りは一緒らしい。
「アンお姉ちゃんが着られる服がありません」
「……お前の物ではサイズが合わないか」
「上は何とかいけるんだけどねー。下がワカメっちゃうの」
「ぶっ」
舞の言葉に、良が口の中の物を噴出した。キクが迷惑そうにそれを見上げる。
「ワカメ？」
その言葉は上手く変換されていないようで、アンには意味が分からない。
現在のアンの服装は、昨日借りた寝巻きのままである。
……この世界のスカートはやたら短く、さらにアンが履いているのはドロワーズである。
今朝は早くに起きて色々試しては見たものの、全て下からはみ出してしまった。
ワカメってそういうことかとようやく当たりをつけ、アンは赤面した。
「だから、今日は皆で買い物に行こうよ」

それを楽しそうに見てから、舞はキクにかかった内容物をはらっている良に提案した。
「面倒くさい。お前らだけで何とかならないのか？」
「私お金無いもん。お母さん資金渡してくれるならそうするけど？」
舞は両手を広げた後、ニヤリと笑った。お母さん資金……一体なんだろう。
アンが首を捻っている間にも、良と舞が言い争っている。
「お前にサイフなんて握らせたら、スッカラカンにしてサイフまで落としてくるから却下」
「お金入ったまま落とすよりマシでしょ？」
「最悪中の最悪じゃないだけだろうが！　その浪費癖と落し癖を直せという話をだな……。もう良い、しょうがないから俺も付き合う」
「最初からそう言ってくれれば良いのに」
「はいはい、俺が悪かったよ」
ため息をつく良と、言いながら嬉しそうにしている舞。
こうして見ると普通に仲の良い兄妹に見える。
やはりあの風呂場での言葉は冗談だったのかしらとアンはぼんやりと考えた。
「じゃぁ撫でて撫でて」
「意味が分からん」
言いながらも、良は抵抗が無駄だと悟っているのか、それとも自らも撫で中毒なのか妹の頭を撫でる。
「んっ……」
目をつぶり、舞はその感触を一時も逃がさないようにしているようだ。開いた口に紅潮する頬。髪をかき上げられる度に漏れる吐息。
やはり、兄の愛撫に彼女が耽溺しているのは本当のようだ。
アレってそんなに気持ちいいのかな。思ってからアンは、プルプルと首を左右に振った。私ったら何を考えているのかしら。
「おう？」
ふと、良の指の動きが止まった。見れば、キクがテーブルの下か

ら顔を出し、彼の服を引っ張っている。
どうやら自分以外を撫でていることが気に入らないらしい。
「……むっ」
目を開けた舞が、それに気づきキクを睨む。
キクもまたアンを睨み返し、彼女らは傍目にも視線の火花が幻視できるほど激しく睨みあった。
異世界最強生物に喧嘩を売るなんて無謀な！　とも思うのだが、舞の底知れなさを考えると何故か良い勝負をしそうな気もしてきてしまう。
いやいや、そんなことより止めなければ。アンが声を上げようとした時。
「あー、バカ、喧嘩すんなお前ら」
良が、舞とキクの頭を同時に撫でた。
へにゃりと、双方の力が抜ける。相変わらず魔法のような指だ。
「何だ、お前も撫でて欲しいのか？」
「りょ、良さんは、自分の手を傾国兵器だと自覚してください！」
アンの視線に気づいた良が、こちらを見てそんな事を言う。
冗談ではない。自分も撫でられてしまったらどうなることか。
それから緩みきった一人と一匹の顔を見て、この人と暮らしていて本当に大丈夫だろうかとアンの心には再び不安が渦巻くのだった。

VS羞恥プレイ

「あのー。本当にこれで外に行くんでしょうか」
玄関に手をかける段になって、アンはもう一度確かめた。
「三回目だぞ。いい加減覚悟を決めろ」
振り向いた良が、呆れ顔で彼女を見る。
「で、でも、キクちゃんをお留守番させるのも不安ですし」
「きちんと言い含めたし、餌もたんまり置いておいたから平気だろう」
流石にドラゴンを街に連れ出す訳には行かないので、今回のキクは留守番である。
置いて行かれることを嫌がったキクも、最初は良の服の端に噛み付いては破り噛みついては破りをしていた。
だが良が、「帰ってきたら千回撫でてやる」と約束してやっと大人しくなった。
もしかしたらあの子にも翻訳の魔法が効いているかしら。
だとしても数は数えられるのか。色々と疑問は沸いたが、今はそれよりも大事がある。
「というか、個人的にはお前を一人にする方が怖い」
「わ、私を何だと思ってるんですか！？」
「暴走特急が村娘の服を着たような女」
「意味は分からないけどバカにしてますよねそれ」
「まぁ今は村娘ルックじゃないけどね」
アンの後ろで靴を履こうとしている舞が、笑顔で告げる。
その通り、今のアンは昨日こちらに来た時とはまるで違う格好をしていた。
上下共に良の私物、Tシャツとジーンズというのだったかを着せられ、足にはサンダル……これは彼女も知っているが、材質がとても柔らかい物でできていた。

しかし彼女が躊躇っている理由はそれではない。
「大丈夫だよ。ズボンなんだから、何もつけてなくても下からは覗けないって」
「や、そ、それはそうなんですけど」
舞がフォローするが、人に言われると恥ずかしさが更に増す。
そう、今彼女は、下着をつけていなかった。
「どうしても、下に履いちゃだめなんですか？」
「だってラインが崩れちゃうじゃない」
「という事は、今見えてるのはそのままのラインって事じゃないですか！」
「あはは、まぁお兄ちゃんのだしそんなにピッタリはしてないでしょ？」
「はい、それは確かにそうなんですけど、ぶかぶかなので今度はズリ落ちてきちゃって」
言いながら、アンは何度目か分からないジーンズの上げ直しをした。
サイズの合うベルトも、この家には存在しなかった為このズボンはひどく不安定である。
「腰の下の所で履けばいいんだよ。ローライズって言って流行ってるんだから」
「す、凄いんですねこっちの世界って」
「……」
バタン。
アンが感心していると、良は無言でドアを開け外に出て行ってしまう。
「あ、あれ、良さん？」
「お兄ちゃんには刺激が強すぎたかなー」
何の事だろう。アンがそう思っている間に舞も彼女を追い抜き外へと出て行ってしまう。
「あ、待ってくださいよぉ！」

仕方なく、アンも意を決して外に出た。

「あっづぅーーーーい！」

外に出ると、いきなり舞が叫んでいる。

アンも外に出てみて驚いた。

この世界は、今夏真っ盛りだ。分かっていたはずだが、あのクーラーという道具に慣れすぎて、忘れていた。

そしてこの世界においても蝉は元気なようで、外に出るとその凄まじい鳴き声が眩暈を加速させる。

まぁ二十年も土の中にいれば、残りの一日ぐらい騒ぎたくもなるだろう。儚い蝉の寿命に免じて、アンは我慢してやることにした。

「何かこう、まとわりついてくる暑さですね」

「この国は湿度が高いからねー。アンお姉ちゃんの所は違うの？」

「まぁ、夏は暑いものだと思いますけど……こういう風にジメジメはしてません。コワリの辺りなら年中雪が降ってるんですけどね」

「……羨ましい事だな。やはりこの世界は糞ぅだ」

同じくだれた様子でポケットに手をつっこみながら、良が呟く。

言いながらも、何か嬉しそうである。

「一年中雪って、雪かきが大変そう……」

「雪で建物も潰れちゃいますしね。だから首都のコワリワダンではゴーレムによる除雪をしたり、道や建物を魔法で暖めたりしてるんですよ」

「へぇー」

「……お前から、初めて異世界らしい話を聞いた気がする」

良が珍しく、目を丸くして驚いている。アンも人づてに聞いた話なのだが、彼がこう素直に驚いてくれると妙に嬉しい。

「えへん」

「そのこちら基準で妙に古臭いリアクションが異世界で流行りかはともかく、お前の功績では一切無いからな」

胸を張るアンに無愛想に告げた後、良が歩き出す。
アンと舞もその後に続いた。
「まぁ、せっかくだからもっと異世界の話をしていいぞ。ただし涼しい話限定だ」
口調は仕方なく、といった感じだが、顔にはうっすらと笑顔すら浮かんでいる。
自分の発言で彼からそれを引き出したのは初めてだ。
嬉しくなり、アンはとっておきの話をする事にした。
「あ、じゃぁ街に現れた一匹のゾンビによってジワジワと壊滅していった大都市レグンワダンの話を……」
「か、怪談も禁止だ！」
だが、アンがそれを話し始めた途端、良は慌てた様子で耳を塞ぎ叫んだ。
「良さんって……」
「お兄ちゃんって、たまに私でも引くぐらいあざといよね」
魔王を目指しているとは思えない彼の醜態に、女性陣が冷えた視線を送る。
仕方なくアンがあちらの世界での夏の快適な過ごし方、冬の風物詩などを話している内に、目的の場所に着いた。
アンにとっては周囲の建物は皆同じように見え、道は複雑に曲がりくねり地面もずっと灰色で似たような景色に見える。
この道を彼らがどう迷わず歩いているのかが気になったが、良が話にご満悦なようなので、自らの好奇心を満たすのは後回しにした。
「うむ、美女型スノーエレメンタルの抱き枕か！　俺も魔王になった暁には是非使用しよう！」
ご満悦になったのは涼しくなったからなのかしら。思いながらもアンは目の前の建物を見つめた。
家が五つほど積みあがったような高い建物である。先ほどまでもこういった物（舞はビルと呼んでいた）はあったが、これは横にも長い。

まるで家のお化けのようだと、アンは思ったが、良は怖がっていないようだ。
アンが見上げている間に、良が正面にあるガラスに向かう。
「危ない！」
きっと良さんは抱き枕で頭がいっぱいになってそれが見えていないのだ。
アンは慌てて声を上げたが。
「ん？　何がだ」
グオーと静かな音を立てて、ガラスのほうが良を避けてぱっくりと左右に割れた。
「ほぇー。魔王ともなるとガラスが避けて通るんですねー」
「いや、アレただの自動ドアだからね」
感心するアンに、後ろから舞がツッコミを入れた。
自動ドアとな、と、アンもそのガラスの前に近づいてみると、確かにそのガラスが自分を左右に避けるではないか。
離れてみると、閉まる。
しゃがんで近づくが開く。
「良さん！　これ凄いですよ良さん！」
「五歳児かお前は！　良いから早く入れ！」
「アンお姉ちゃん、周りの目もあるから後でね」
舞も流石に恥ずかしそうにして、アンの背中を押す。
周囲を見ると、確かに他の人間が何事かとこちらを見ている。
そういえば、王都クマルワダンに初めて来た人間は、入り口にいる人間に調教された警備用の偽竜ワイバーンを竜だと勘違いし、慌てたり逃げ出したりする事があるらしい。
あぁ、これってそれと同じなのか。
そう合点がいくと、アンも赤面し、こそこそと中に入る。
左右を見回すと、人々が何かを食べていると思えば、隣では靴が売っている。
そういえば、自分は買い物をしにきたのだった。という事は、こ

こは様々な店の集まりなのだろう。
それとも室内でする市のようなものか。
アンはそう当たりをつけた。
「キョロキョロするな。まったく……」
注目を受けた所為か、不機嫌になった良がアンを叱る。
だが、振り向いたその顔が、ばっと一点を見たかと思えば、すぐに前へと戻される。
「良さん？　えーと、まずは何処へ行きましょう」
「まずは下着かな。ていうかブラ。早急に」
後ろにいた舞が、良の代わりに答える。彼は耳が赤く染まっていた。
「え、ブラってなんですか？」
「アンお姉ちゃん、ごめんね」
「はい？」
「そのTシャツ、透けてる」
「透け……えええ！？」
彼女が自らの体を見下ろすと、そこには汗で張り付き透けた白いTシャツがあった。
あれ、さっき私色んな人に見られたよね。という事はもしかしてその人達にも……。
「……み、み、みら、みらみらみら」
「ちょっとお姉ちゃん！？　気をしっかり！」
店内は、あのクーラーという代物のおかげで大分涼しい。
しかしアン自身の体温はぐっと上がって頭を煮立てさせ、外にいたとき以上の汗を彼女に流させたのであった。

VSエスカレーター

「うぅ、もうお嫁にいけない。婿も来ない」
「だ、大丈夫だ！　上手い具合に胸の文字で大切な部分は隠れていた！」
「割としっかり見てたんだねお兄ちゃん」
両手で胸を隠しながら歩くアンを、良が懸命に慰める。だが、それはあまり効果があるとは言えない内容だった。
タオルで丹念にふき取ったおかげで既に透けてはいないのだが、アンは怖くて手を離せずにいる。
「とりあえず、あのお店で良いかな」
ふと、舞が前方にある店を指差す。人形の胸に巻きつけられているのがそのブラと言う奴だろう。そういえば昨日風呂場で舞もつけていたなとアンは思い出した。
形状まではよく覚えていないのだが……。
「おい、あっちのバーゲン品で良いだろ」
対して良が指差した方向には、その下着が山積みにされていた。
「何言ってんのお兄ちゃん。アンお姉ちゃんは初ブラなんだよ？　サイズ分からないんだよ？　店員さんに測ってもらって、良いのオススメしてもらわなきゃ」
「むぅ、そういうもの、なのか」
先程の負い目もあってか、良は舞に逆らえず、押されるままになる。
彼の承諾を得たと決め付けたらしい舞が、アンの手を引いて店の前まで歩く。
「アンお姉ちゃんは外人の振りしててねー。話が食い違っちゃうとめんどいだから」
「ガ、ガイジン？　メンドイ？」
聴きなれない言葉達に、アンの頭にはクェスチョンマークが踊っ

た。
「要するに、言葉が分からない振りしてくれっちゃーって事だわさね」
「あの、私既に舞さんの言語がよく分からないんですけど……」
「まぁ、店員さんが何を言ってもニコニコしてれば大丈夫だよ。あ、お兄ちゃんがお財布持ってるんだから早く来てー」
アンに答えながら、舞は後ろで不貞腐れている表情の良を呼び寄せた。
良がゆっくりと近づいてくる。
彼らの話では舞は浪費が激しいそうなので、彼女の好きに買わせる訳にもいかないのだろう。
「すみませーん。あの、サイズを測りたいんですけど」
「いらっしゃいませ。はい、かしこまりました」
舞が尋ねると、人の良さそうな若い女性の店員がそれに応えた。
「こっちの女の子なんですけど」
「はい、それでは奥のほうへご案内いたします」
言って、店員は彼女らをカーテンで仕切った場所へ案内する。
良はそこまでは入ってこず、手前で彼女らを待っているようだった。
「えーと、では上を一枚脱いでいただけますか？」
「えぇ！？」
「ご、ごめんなさい。下はつけてないのでちょっと」
「え、そうなんですか？」
「そういう風習の国の子なんです」
「はぁ、なるほど不勉強でした」
舞が言い切ると、多少押された形で納得する店員。
それから彼女の胸にメジャーを当て、寸法を測っていく。
「七十四のＡですね」
「なるほどー」
店員の報告に、舞が曖昧な笑顔をアンに向ける。

その意味が分からないアンも、やはり曖昧な笑顔で返した。
「ありがとうございます。それで……」
舞が店員と相談し始める。それはもはやアンには理解不能のやり取りであった。
黙っていろと言われた事もあり、ニコニコとしたまま口を出さずにいると、やがて舞が良を呼ぶ。
金額が告げられ、彼は渋面を作りながらもサイフを開けた。
「はい。アンお姉ちゃん。パンツも一緒だからあっちでつけようね」
そう言って、舞がカーテンに仕切られた部屋へとアンを導く。
「え、あ、じ、自分で」
抗議しようとしたアンだが、舞が店員を見つつ人差し指を立てるので、慌てて黙る。
「それにこれ、寄せて上げる奴だから、やり方知らないと損だよ？」
寄せて上げる？　何の事だろう。アンが不思議に思って彼女を見ると、舞は胸を両脇から、寄せて、上げて見せた。
なるほど、そういう事か。納得した。うん、興味が無いと言えば嘘になる。
しかし、これは異世界の技術を体感してみたいという純粋な興味だ。自分に言い訳をしながら、アンは舞に続き、カーテンの中へと入っていった。

そして数分後。
舞に下着を装着してもらったアンは、時折自らの胸元を馴染ませるように擦りながら歩いていた。
先程から妙な違和感がある。
「最初はみんなそんな物だよ」
舞が苦笑しながら彼女に言い聞かせる。
まるで舞のほうが年上のような言いようだが、これに関しては確かに彼女の方が先輩であるので仕方ない。

「こうやって押さえつけて、その、小さくなったりはしないんですか？　胸が」
「ううん、大丈夫みたいだよ。むしろちゃんと着けておいたほうが、成長するみたい」
恐る恐る尋ねると、予想外の答えが返ってくる。
お、大きくなるんだ。この世界の品物って凄い。世に数点しかないマジックアイテムですら、本当に効果があるものは稀だと聞くのに。
アンは思わず胸元に指を入れ、つけたブラジャーを確認する。
着ける前は丘だった胸が、今は小山ではあるがきちんと二つ、存在を主張しているのも嬉しい。
ふと、視線に気付く。
見上げると、良と一瞬目が合う。
しかしそれから彼は、もげるのではないかという程に首をあらぬ方向へ向けた。
「お兄ちゃんのムッツリ」
「ななな何の事だか一向に分からねぇな！」
舞が不機嫌そうな顔でボソリと言うと、良はよく分からない口調になりながらそう返す。
私を、見てた。何か言い忘れた事があったかしら。アンはそう考えてから思い出し、ポンと手を打つ。
「七十四のＡだそうです」
「報告せんで良い！」
アンが告げると、良は顔を真っ赤にして怒った。
これではないらしい。なんだろう。これは真名のごとくあまり人には言わないほうが良い数字なのだろうか。
そしてそれから彼女は、もう一つ言い忘れた事があったと思い出した。
「そうだ、良さん。お金もありがとうございました。あの、私……」
「それも言わんで良い。俺の金じゃないしな」

言いかけたアンを遮って、良は言い捨て、先程より早足で歩いていってしまった。
「あの……？」
自分の金ではないというのはどういう事だろう。不思議に思って舞を見るが、彼女も答えたくはないようで、苦笑しつつも説明をしたりはしてくれない。
お金の話なんて下世話だったかしら。アンが首を捻っていると、やがて前方の良が階段の前で立ち止まった。
「わぁぁ……」
階段、だと思われる。が、動いている。彼女の目の前にある急角度のそれは、足元からブロックがせりあがっては新たな階段になる、動く階段であった。
「エスカレーターって言うんだよ」
アンに説明してから、舞がそれに乗って上がっていく。
「二階に行くぞ」
不機嫌な顔のまま、良もそれに続いた。
え、何で動くのこれ。昇りながら動けば半分の時間で済むじゃんって計算？
どれだけものぐさなのこの世界の人は。
というか動かれたら乗りにくいじゃない。そう、凄く乗りにくいじゃない。
半ばパニックになりながら、それでもアンは片足を踏み出そうとする。
『エスカレーターにお乗りの際は、手すりに掴まり黄色い線の内側にお乗りください』
すると、どこからかそんな声が降ってきた。
「え、ご、ごめんなさい！」
それに反射的に謝って足を引く。黄色い線の内側……なるほどこれか。あぁでもこれ動いてるし一段の幅も靴の大きさぴったりぐらいしかない。そもそも内側ってどっちだろう。今から入る訳だから

今私がいるのが外側？　じゃぁ踏み越えて……いやいや一ブロックの奥側に印がついているんだから手前が内側か？　線を踏んでしまったらどうなるんだろう。
やっぱりこの階段に巻き込まれて死んでしまうのだろうか。異世界の人は楽をするためだけに、なんて危ないことをするんだろう。
悩み始めると、一向に足が動かない。
今はいないが後ろに人が来てしまったらどうしよう。良さん達は上がってしまった。アンが半泣きで階段の上を見上げると。
「何をしているのだお前は！」
どかどかと音を立てて、良が動く階段を逆走してくる所だった。
「ダ、ダメですよ良さんそんな事しちゃ。ほら、上の人だってしないでくださいって……」
「うるさい！　良いからさっさと乗れ」
動く階段にあわせて歩きながら、良が促す。
「た、タイミングが掴めなくて」
「こんなもの、余程でなければ巻き込まれたりはしない！」
「やっぱり巻き込まれるんですか！？」
「あぁもう！」
どうしても乗ろうとしないアンに対し、良が手を差し伸べた。
「俺が手を引いたタイミングで乗れば大丈夫だ！」
「は、はぁ」
「魔王の指示を疑うのか？」
「いえ……」
普通なら、魔王の言う事など信じられるはずがない。
しかし、多分。
「お願いします」
この人なら、自分を騙す事はないだろう。彼を魔王だと思っているというのに、何となくアンにはそう信じることができた。
素直に彼の手を握る。
「お、おう、いくぞ、せーのっ」

良が手を引くと、つんのめるようにアンの体が前へ一歩出る。
そうして彼女の体は、いつの間にか動く階段に乗っていた。
足をじりじりと動かし、黄色い線を踏まないように調節する。
「あ、ありがとうございます」
「本当にドン臭い娘だなお前は」
その様子を見ながら、良が鼻から息を吐いた。
「え、えへへ、村でもよく言われました」
「やはりな。そいつらの気持ちがよく分かる」
そうだ、彼らも自分の事をそんな風に評していた。でも、良は、彼は村人達とは違う。
「……でも、助けてくれたのは良さんが初めてですよ」
言いながら、アンは笑顔で彼を見上げた。
本当に、自分は彼らに助けてもらってばかりだ。
「ば、俺は、その……」
それに対して慌てふためく良。彼もまた、褒められ慣れてはいないのかもしれない。
「良さんって本当にしん……」
微笑ましく思いながら、親切だと言いかけて、アンははっと口をつぐんだ。
そういえば、彼はこの言葉を特別嫌っていた。
「今何を言いかけた」
ほら、言おうとしていた事を察してこちらを睨んでいるし。
どうにか誤魔化さなければ。ええと、確かいい人だと褒めても怒る。でも悪口もどうだろう。葛藤の末、アンは口を開いた。
「りょ、良さんって卑怯者が紳士服を着たような人ですね！」
「どういう例えだ！？」
「え、えぇ！？　思いつきで悪さを称えたにしては、良い言葉じゃなかったですか！？」
「……多分異世界人だからではないだろうが、お前の言語感覚はさっぱり分からん」

結局怒られた。良さんって難しい。
などとアンが考えている内に動く階段が終わりに差し掛かる。
良が再びアンの手を引き、そこから脱出させた。
「やっほー。大丈夫だったアンお姉ちゃん」
「あ、はい。良さんのおかげで」
二階で待っていた舞が、アンに手をひらひらと振る。
「まったく。良い迷惑だ」
言いながら、良はアンから手を離した。
暖かい手だったなと、アンはぼんやりと考えた。
「さ、次行こー」
舞が先導して歩き出す。
良の撫で技術の秘密は、あの手の暖かさにあるのかしら。などと考えながら、少し跳ねる胸当ての奥を鎮めつつ、アンはその後ろに続いた。

VS下着アーマー

「こういうのとかどうかなぁ」
「え、でもそれだと露出が多過ぎませんか？」
「うん、だからこういうのを併せて普段は清純、いざとなったら装甲パージしてがばーって寸法な訳」
「な、なるほど、色々考えられてるんですね」
飾ってある衣服を一つ一つ眺めながら、舞がそれぞれに対して説明をしていく。
そのファッション講座を、アンは熱心に聞く。
エスカレーターとやらを上がって二階に来たアン達は、そこで色とりどり、種類も様々な服を物色していた。
「お兄ちゃんはどれがいいと思うー？」
と、後ろで暇そうにしている良に、舞が問いかける。
「そこの安い奴」
「んもーお兄ちゃんは。安いって言ってもそれじゃ着まわしし難いでしょ。それならこっちの……」
「はいはい。お前もこんなのに付き合わされて大変だな」
舞を適当にあしらいながら、良はアンに視線を投げた。
「いえ、色んな服に色んな気持ちが篭ってるんだなって思うと楽しいです！」
「お前は良い事探しの達人か……」
アンが答えると、呆れた顔をした良は付き合っていられないとばかりに首を振った。
「そういえば、異世界の服はどういった感じなのだ？　言っておくが、お前のようなファンピーの話はいらんぞ」
「私の場合……え？　あ、じゃぁええと私のお姉ちゃんの話をしましょうか」
自分の普段着ている服について話そうとした所で釘を刺され、ア

ンは仕方なく別の人間について話すことにした。
「へー。アンお姉ちゃんって妹なんだ」
「と言うか、お前の姉は一般人ではないのか。どうせファンピー一家だろうと思っていたのだが」
「違いますよ。うちのお姉ちゃんは街と街の間の護衛をしたり、遺跡を探索したりする仕事の人です」
「冒険者か！」
「えーと、そう呼ぶのが良い方の言い方ですね。悪い方だと遺跡荒らしなんて言われますけど」
そんな風に解説しながら、アンはそういえば姉と最後に会ってからもう一年は経つなと思い返していた。
元気だろうか。あんな職業なので何があってもおかしくないが。
「それで、お前の姉はどんな格好なのだ。金属の全身鎧か？　いや、遺跡などに行くならば動きやすい皮製のものか？　それとも部分鎧的な……」
先程までは目だけをこちらに向けていたくせに、急に体をこちらに向け、詰め寄ってくる良。
その変貌に困惑しながら、アンは左右を見回した。
そもそも中々会う事のない姉を思い出したのは、この売り場にあったそれを見た所為であった。
見つけたそれを指差し、良達に告げる。
「こんな感じです」
「こんな感じって……それビキニじゃん」
「ビキニアーマーだと！？」
アンが指差したのは、カラフルな、今アンがつけている下着のような形状の、舞曰く水着と言うものだった。
これを見た時、アンはこちらにもこういう服があるのだなと感心したものなのだが……。
「ふざけるな！　こんなものが現実……えーと、現実で良いんだよな……現実に存在するというのか！？　何故だ！？　お前の姉が痴

女だという以外に理由があるのか！？」
「お、お兄ちゃん、どうどう」
アンに対し、先程よりも激しく詰問する良。
効率も何も、そんなの当たり前ではないか。半ば憮然としながらアンは答えた。
「えーと、だって冒険者さんの体って、鉄なんかより硬いじゃないですか」
「はっ！？」
「ほら、駆け出しでは無理ですけど、少し鍛えればここの屋上から飛び降りるぐらいは平気になるじゃないですか」
「ならねーよ！　ここ五階建てだぞ！？　え、なら、ないよな？」
アンがきっぱり断言するので不安になったのか。良が隣の舞に問いかける。
「こっちの世界ではね」
すると今度は彼女がきっぱりと首を横に振り、アンが驚愕する番となった。
「ならないんですか！？」
「ならねーよ！」
舞に自信をもらった形で、今度は力強く断言する良。
そうか、ここはやはり異世界なのだ。そういえば先程の動く階段と言い、この世界の人々はやたらと楽をできる発明を生み出しているようだった。
あれは怠惰なのではなく彼らがひ弱だからだったのだ。
その土地の服飾、風俗には何かしらの理由がある。改めて納得しながら、アンはこの世界の人間にシンパシーを感じた。何故なら……。
「それで、お前の姉ちゃんは何故ビキニ鎧なのだ」
故郷での事を思い出していたアンを、良の声が引き戻す。
それで立ち返ったアンは、急いで考えをまとめ説明をしだした。
「え、あ、はい。だから、半端な防具をつけるよりは体の動きを邪

魔しない格好をしたほうが、結果的に怪我が少なくなるんです。後は、依頼人に自分は強い冒険者ですよってアピールできるってお姉ちゃんは言ってました」
姉に聞いたままの知識だが、アンはなるべく良に分かりやすいように説明した。
「へー……あぁいうのってお色気以外にも、ちゃんと理由があるんだね」
「ほ、本当に、物理的に硬いとは。ＲＰＧでレベルの上がったキャラが、裸でゴーレムに殴られても一ダメージなのが科学的に正しいとは……いや、科学だよなこれ。物理学か？」
納得の声を上げる舞。対して良はといえば、頭を抱え口調が変わり混乱しきっている。
他世界の常識とは、それが相手にとって当たり前であればあるほどこちらにとってはショックが大きいものだ。
アンには昨日今日でそれがよく分かっていた。
「……つうかこんな格好が主流なら、お前もケツ出しやら透けやらで騒ぐ必要はなかったではないか」
頭を抱えたポーズのまま、はっと気づいた様子の良がアンを見る。
「あ、あくまで冒険者さんの話です！　私はいくら丈夫になってもああいう格好は流石に……」
彼の言葉に自らの痴態を思い出し、アンは赤面した。例え自分に能力があったとしても、あんな格好で往来を歩くのはごめんだ。
「ていうか、本当にそのお姉ちゃん以外もそんな格好してるの？」
「え？　えーと……」
そういえばと、アンは考えた。幾人か冒険者は見たことがあるが、確かに姉ほど薄着の人間とは会った事がない。
「お前の姉が露出狂だっただけなのではないか」
沈黙したアンに、にやりと笑って良が言う。
「人の姉を痴女呼ばわりしないでください！」
「わっはっは、良いではないか、お前にもその痴女の血が流れてい

るのだ！」
「やめてくださいよー！」
「わっはっは！」
「二人とも、公共の場でそういう単語を叫びながらはしゃぐのやめて」
アンを大声で笑いながら胸をそらす良と、その胸をぽかぽかと殴るアン。
舞がそれを恥ずかしそうに止めると、慌てて周囲を見回してからアンと良はお互いに背を向けた。
「お、おう」
「ごめんなさい」
「んもう、二人とも羞恥心は大切にしようね」
むしろ自分はここに来てから恥ずかしがってばかりなのだが。
思いながら、アンはまた顔を赤面させた。

VS劣等感

買い物に行ったアン達は、すっかり日が暮れた頃に帰宅した。
この世界の生活必需品というものは思いのほか多く、ついでに夕飯までそのデパートというところで済ませて来たためだ。
そして、長時間家に残された子竜、キクだったが。
結果だけ言ってしまえば、この子竜の留守番は完全に失敗に終わった。
幼きドラゴンは良を待ちきれず、クッションを二つ破壊し、ソファーを酸で溶かし、冷蔵庫を漁り開けっ放しにし、中の食材をいくつかダメにした。
良は大いに怒り、結局きちんと留守番をすれば帰ってきた後キクを撫でるという約束は、破棄となった。

そして次の日の昼。
アンは居間で洗濯物を畳んでいた。
「お兄ちゃんのナデナデを喰らいたての体で、半日も我慢できる訳ないのに」
妙に勝ち誇った顔をしているのは舞。部屋の隅で丸まっているキクを横目に、彼女はアンと向かい合わせになり畳むのを手伝っている。
兄とのスキンシップを邪魔されてから、彼女はキクに妙な対抗心を持っているようだ。
キクが暴れた理由はナデナデ中毒だったのか。良の下着を畳みながら、アンは改めて彼の指に恐怖を感じた。
「クッションはともかくソファーはどうすれば良いのだ。とりあえず布テープを貼っておくとして……」
件の良は、大きな穴の開いたソファーを前にぶつぶつと呟いてい

る。昨日も買い物が終わったサイフの中身を見て悲しそうな顔をしていたし、魔王家の財源は底なしと言うわけではないらしい。
自分も節約には協力しようと、アンは決意した。
しかしそれはそれとして、良が呟く度彼の方を気まずそうに見、彼に気づかれる前に窓へと視線を向けなおすキクは少々不憫だ。
「ま、まぁ、ドラゴンがやった事としては被害は極小でしたし。むしろ家が壊れてなくてラッキーぐらいに思ったほうがいいかと」
自分の所為で帰りが随分遅れたという罪悪感も手伝い、アンはキクをフォローした。
「力が強いのは分かるが、そんなに凶悪なのかこいつは」
アンに言われ、良が胡散臭げな視線をキクに向ける。
彼は自分がどんな危険なものを飼っているのか理解していないのか。アンは必死になって説明した。
「あ、当たり前ですよ。普通の剣じゃ傷も与えられないし、魔法だって弱いものは届く前に消されますし、骨格はトカゲというより猫寄りで、大きくなればなるほど素早くなるんです！」
へぇ、と感心したようにキクを見る良と舞。
あまり恐怖した様子がないのは、例えに猫など出したせいだろうか。
「村娘の癖に詳しいな。例の姉の受け売りか？」
「それもありますけど、ドラゴンってやっぱり有名なんです」
「それはやはり、こいつが異世界最強の魔物だからか？」
「えーっと、実はドラゴンって、魔物じゃないんじゃないかっていう学説が有力なんです」
「魔物以外のなんなのだ、こいつが」
穴を避けてソファーに座りながら、良がキクを指差す。
少し考えてから、アンは答えた。
「ドラゴンってくくりの動物……ですかね。そもそも魔物というのは、元々は魔王が作り出した生物って意味らしいんですけど」
現在、アンのいた世界にいる魔物のほとんどは初代魔王が作り出

したもので、それらが交配しあったり進化して種類が増えている。
人間の家畜、もしくは友として暮らす魔物もいるので、人類に仇名す生物を全て魔物とは呼ばない訳だが……。
「多分この世界にはないと思うんですけど、私達の世界の主要な街とか道とかには、魔物避けの結界が張られているんです。魔王が毎回現れる北の大地デガメルギオから遠ざかるほど強い結界が張られていて……というか魔王はそれを近場から壊そうとするので、遠地ほど強い結界が維持されてるんですけど」
アンのいた村は北の大地から遠く離れており、彼女の通った泉への道もまた魔物避けの結界が張られていた。しかし。
「でもドラゴンは、それに引っかからないんです。いつでも、どこでも、どんなに結界が強くてもフラっと現れてその場所を破壊しつくすので、ドラゴンは有名なんです」
ドラゴンは魔物避けの結界の影響を一切受けない。そしてだからこそ、ドラゴンは魔物ではないのではないかと言われており、人々に恐れられているのだ。
「それは、えげつないな」
「最強っていうか最凶？」
それを聞き、ようやく顔を曇らせる兄妹。
舞が同じ発音の言葉を繰り返すが、アンにはそのニュアンスの違いがはっきりと分かった。これも翻訳魔法の力だろうか。
キクがこちらを見、満足げに鼻を鳴らす。勘違いかもしれないが、どうやら恐れられてご満悦のようだ。
「そちらの方が正しいかもしれません。ドラゴンの制御ができた魔王は歴代でも二人だけで、その時は両方とも世界が本気で支配されかけた、もしくは一度支配されてしまったそうですから」
だから、竜とは本当に恐ろしい生き物なのだ。普通の人間なら間違っても手元になど置きたくは無いのだが。
「そして俺が三人目というわけだ」
その言葉を聞き、良がニヤリと笑いを漏らす。

しまった、余計な事を教えてしまったかもしれない。良が世界征服の野望を持つ魔王なのだと久々に思い出し、アンは呻いた。
「そもそも魔王って、なんなの？」
舞がくりくりとした眼でアンに尋ねる。魔王の妹がそれを聞くのか。
改めて問われるとアンも困ってしまい、良の方を見る。
「魔王って、なんなんでしょう」
「俺に聞くな」
「え、だって良さんって、魔王の業務内容に憧れて就職を希望してるんじゃないんですか！？」
「魔王を職種のように言うな！　俺はその、せっかく異世界に行くのだからでかい事をしてやろうと……」
「ノープランだったんですか……」
良の言葉に、半ば呆れるアン。良は何かやりたい事があってあちら側に行きたいわけではなかったのか。
では何故異世界になど来ようと思ったのか。アンは疑問に思ったが、同時に良がこちらを睨んで「それで？」と眼で尋ねる。
どうやらアンなりの魔王の定義を尋ねたいらしい。
「えーと、魔王っていうのは、とりあえず北の大地から現れて、魔物を従えて人間を襲う人、もしくは魔物の総称だと思います。大体五十年に一回ぐらい現れて、人類と戦争をします」
思いの外あやふやな説明になってしまった。しかし前回の魔王が倒されてからアンは生まれ、今回の魔王に関しても、北のほうにそういうモノが出たという話しか片田舎の村には入ってこない。
ドラゴンとは違い、魔王とは謎に包まれつつも人々に恐れられる存在なのであった。
「……スパンの長い祭りか自然現象のような奴らだな」
「良さんが収穫祭のような楽しいお祭り魔王になるというのなら、私も喜んでこちらの世界に招待するんですが」
アンが苦笑しながら言うと、良は嫌だねと顔を歪ませた。それな

ら人類と共存できるのに。アンは口を尖らせてから、ふと思いついた事を言ってみた。
「大きい事をしたいのであれば、勇者様になったらどうです？」
これなら成功すればこちらの世界で最大級の功績になりうるし、アンも彼を喜んであちらの世界に招待できる。
良い事ずくめだと思ったのだが。
「勇者……勇者だと？」
良は、こめかみに血管が浮き出るのではないかというほど顔を歪ませている。
「ダ、ダメでしょうか」
「当たり前だ！　バカを言うな！　勇者など、そこら辺に悩んでそうな奴がいればおせっかいに手を伸ばし、善意ですという顔をして、し、親切を押し付けるはた迷惑な職業ではないか！」
ソファーから立ち上がり、ジェスチャーを加えながら自らが持つ勇者像を演説する良。
え、それのどこがいけないの？　とアンは思うのだが、彼にとっては大問題らしい。
何かまずいことを言ったでしょうかと舞を見ると、彼女は弱弱しい微笑みで首を左右に振った。
「あー、そんな者になどなれるか！　俺はやっぱり魔王だ！　魔王になるぞ！　よし！」
ついに良は自分の就職先について決意を固め、握りこぶしを作って天に掲げた。
私、もしかしてとんでもない人に火をつけてしまったのでは。
初日は物理的に火をつけたが。
などとくだらないことを考えていると、良の顔がこちらを向く。
「よし、ではお前は俺様に今すぐ魔法を教えるのだ！」
そして彼は、突拍子もない事を言い出した。
「な、何で急に」
「昨日から考えていたが、お前の姉のようなターミネーターと戦う

ことを考えれば、やはり魔法は必須だ！」
「タ、ターミ？」
意味は分からないが、姉があまり良く言われていないのは分かる。
良の言葉は続いているが何か言い返さなければとアンが考えた。
「お前の世界には魔法が生活に密着しているのだろう？　お前とて魔法の一つや二つ、使えないのか！？」
が、その思考は、彼の言葉で一瞬にして霧散した。
魔法、そうだ。魔法だ。
「使え、ません」
「本当に何も使えないのか？　ほれ、手から小さな火を出す程度でもいいぞ」
「使えません！」
自分でも驚くほど大きな声が、アンの口から出た。
良はおろか、舞とキクまで自分を唖然とした顔で見ている。
「その、すみません。本当に、使えないんです。私の世界には、魔力に反応して動く耕作用の機械もありますが、それも使えません。私には、魔法を使う力が一切無いんです」
小声で、言い訳か、もしくは懺悔をするような調子でアンは語った。
むしろ彼女の世界では、機械と言えば魔力を動力にして動く物だ。アンはそれらをまるで動かす事ができなかった。
何故なら……。
全て吐き出してしまえ、心の中で誰か呟いている。
「その、それは珍しい事なのか？」
「少なくとも、私の村にはいません……」
「で、でもほら、魔法が使えないぐらいなら気にすることないんじゃないかな。別に機械が動かせなくても他にできることは……」
「昨日、言いましたよね、お姉ちゃんの話」
「あ、あぁ、露出狂の姉の話か？」
雰囲気を明るくする為か、良はわざとそういった挑発的な物言い

をしたようだった。だがそれに乗ることは出来ず、アンは頷いて話を続けた。
「冒険者の、人間の皮膚が固くなるのも、ラーナ……魔力のおかげなんです。魔力を取り込んだ人間は、力も強くなりますし病気にも強くなります。一般人でも、仕事や遊びでも体を動かせば、ある程度魔力が体に取り込まれます」
ちなみに、硬くなると言っても鉱石のように弾力が無くなる訳ではありません。むしろツヤは増します。そうアンは補足した。
そう、魔力を体に取り込むことは良い事尽くめなのだ。
それなのに自分は……。
「でも、私には魔力孔っていう、魔力を取り込む器官自体が無いんです。だから、仕事も人の半分しかこなせなくて役立たずでしたし、子供に受け継がれる事を恐れて、もらってくれる人もいませんでした。普通の人より肌を守る力も無いから肌だって汚いし、凹凸だって少ないし」
言い出すと、自分でもその口が止められなかった。おかげで、言わなくて良い事まで次々と口から出てしまう。
良はアンを一般人だ一般人だと言っていたが、自分はそれ以下なのだ。
……部屋に、沈黙が落ちた。
「アンお姉ちゃんの体、キレイだったと思うけどな」
そんな中、ふと舞が呟いた。
「そんな、嘘ですよ……」
魔力が無い自分の体が、そんな風に褒められる物のはずがない。アンの口元に、自嘲の笑みが浮かぶ。
そんな彼女の瞳を、舞がじっと見た。アンも思わず彼女の顔を見る。
「じゃぁアンお姉ちゃんは、私のこと汚いって思う？　私も多分魔力穴だかは無いと思うけど」
「そ、そんなことありません！　舞ちゃんは、その、可愛いと思い

ます」
舞の問いかけを、アンは勢いこんで否定した。そんな訳はない。彼女はアンから見ても魅力的な女の子である。
その返事を聞き、舞は満足げに大きく頷いた。
「うん、私も、魔力なんてなくてもアンお姉ちゃんのこと、キレイだし可愛いと思う。それじゃダメかな？」
そうして、首を傾げて再度問いかける。その言葉が、アンの心にすっと染みこんだ。
こんな事を言ってもらえるなんて。そしてそれを、こんなに素直に受け入れられる日が来るなんて。
「いえ、ダメじゃ……無いです」
喉を詰まらせながらアンが答えると、二人は同時に微笑んだ。
「お兄ちゃんだってそう思うよね」
何か気まずそうにしている良に、舞が話を振る。
良はそれに対し、うっと唸ってから、あらぬ方向を見つつ口を開いた。
「ふん、お前がどう言おうが、俺にとってはお前なんてそこら辺の人間と同じ一般人だ。少しぐらい違うからと言って調子に乗るなよ。というかそんな些細なことより自分の思考のポンコツさに悩め」
喋りながらどんどん首を反らしていき、ついには真後ろを向いてしまったので彼の表情は見えない。
それを見、舞は苦笑しながらアンに告げる。
「ほら、お兄ちゃんも『俺にとって君が大事な女の子だという事には変わりないさ。少しぐらい違うからって何さ。そんな事より君の優しさにカンパイ』って言ってるよ」
「あ、そういう意味だったんですか？」
「言ってねぇよ！」
アンがパンと手を叩くと、良はぐりんと首を正面に戻し、真っ赤な顔でそう言い返した。
何だ、違うのか。何だか妙にがっかりし、アンは肩を落とす。

「その、お前がどう受け取ろうが、それは勝手だが……」
すると彼は、今度は下を向くと、語尾を曖昧に濁しつつそう言った。
「ふふ、じゃぁありがとうございます」
ならば思い切り良いほうに受け取っておこう。
そう決めて、アンは良に礼を言った。
やっぱり、ここの人たちは優しい。
魔法で使えない事に悩み、色んな事を試してきたのが馬鹿らしく思えてくる。
それを思い出し、ふと、アンの脳裏によぎった事があった。
「あの、それで思い出したんですけど、もしかしたらお二人にも魔法を使う方法があるかもしれません」
「なんだと！？」
「お兄ちゃん……現金過ぎ」
身を乗り出した良の裾を、恥ずかしそうに舞が引っ張る。
それに苦笑してから、アンは説明を始めた。
今まで役立たずだと思っていた自分が、この人たちを喜ばすことが出来るかもしれないと期待しながら。

VS魔法

「多分この世界の人にも、魔力孔はあると思うんです。あるけど、使ってない所為で凄く小さくなってるか、魔力塵って言う埃みたいなものが詰まってるんだと思います」

そうでなければ、いくら道具があっても召喚魔法などというものは使えないはずだ。

自らも魔法が使えるわけではないので恐る恐るという感じになりながら、アンは良達にこれから行う事について説明を始めた。

話している最中、良は自らの腕を裏返したりしながらじっくりと見、舞は嫌そうに腕の埃を払うような仕草をする。

そんな事をしても見えたり払えたりはしないのだが、それに苦笑しながらアンは話を続ける。

「それを解消する、魔力孔開放運動っていうものがあるんです。本来は魔力孔が広がりきっていない子供や、魔力孔が弱ってきたりさっき言った魔力塵が詰まったお年寄りがやるものなんですけど」

「……ラジオ体操みたいなものか？」

「名前を聞くとデモとか集会とかしそうだけどね」

アンの講釈に、兄妹が顔を見合わせ交互に何か言っている。

ひとまずそれは放っておき、アンはそれを続けた。

「用途毎に運動の方法は違うので、お二人には効果が無いかもしれません。それでも良いですか？」

「あぁ、可能性があるならそれで構わない」

「私もおっけーだよ」

揃って頷く二人。

やはり自分も覚悟を決めざるをえないようだ。アンは大きく息を吸った。

「では、始める前に一つ注意をします。魔力孔解放運動はある意味神聖な魔法儀式です。途中で疑問、質問があっても絶対に口を挟ま

ないでください。絶対ですよ！」
そして、腰に手を当て、二人に強く警告した。
「あ、あぁ、分かった」
「お、おっけー……」
気圧された様子で首を縦に振る二人。それを見、アンは自らも大きく頷く。
そうして、二人を立たせ、三人で居間の中央に立ち、彼女は体操を開始した。
「えーと、まずは腕立て伏せをしまーす。辛い人は膝をついてください」
言うと、二人が揃ってえ？　という顔をしたが、アンが率先して始めるとそれについてくる。
十回を越えた辺りで舞が、二十回を越えると良も膝をつきだしたので、二人とも体力は無い方なのかもしれない。三十回を越えた辺りで、アンは別の体操に切り替える。
「次は、胸の前で手を合わせて、十秒ほど押し合いまーす」
その際息を吐き、胸の筋肉を意識してという注釈も忘れない。
それを五セット繰り返した後で、アンはなるべく自らの言葉を意識しないようにしながら二人に告げる。
「右腕を持ち上げて、その、右の胸を左手で持ち上げます。反対側も同じように」
少々恥ずかしいが実践して見せると、良が一瞬固まるが、舞に小突かれ真似をする。
「脇の下から、ち、乳房までお肉を集めて、寄せます」
「なぁ、これって……」
言いかけた良を、アンが睨む。それに押され、良は再び口をつぐんだ。
「乳房をゆっくり揉みます！」
良が黙るのを確認すると、アンはやけくそ気味にそう宣言した。
そうしてから、自らの乳房に手を当て、おずおずと動かしだす。

兄妹が同じ角度で首を捻りながら、それに従った。

そうして、それから彼らは二十分ほどその体操を入念に行った。
「しゅ、終了です」
中盤からは赤面しっぱなしだったアンは、熱い息を吐きながらそう宣言する。
しばし、彼らは無言で息を整えた。
そうして、一番最後に息が整った様子の良が彼女に叫んだ。
「バストアップ体操じゃねーか！」
彼女が行った体操は、あの後に行われた物も含め、全て胸、もしくは胸筋を意識させるものばかりだった。
流石に良達も気づいたらしい。というか前半に気づいてずっとお預けを喰らっていた所為で、それが言えた今、若干すっきりとした顔をしているぐらいである。
「ち、違います！　魔力孔を開放する効果もあります！」
「もって言ったね、今」
舞が容赦なく指摘すると、アンはのの字でも書きそうな様子で背中を丸め俯いた。
「だって、この運動を行うと、今まで眠っていた魔力孔が胸から花開いて、劇的な魔力の向上とバストアップ効果が望めるって触れ込みだったんですもん……」
「両方得られなかった訳だ……」
「む、胸は少し大きくなりましたもん！」
「昨日はっきりとAだと聞いたぞ」
「お、お兄ちゃん！　Aでも十センチの幅があるんだからね！　ギリギリAとAAAじゃ全然違うんだから！」
何故か舞の方から抗議が入り、良はため息をついた。
「はいはい、分かった分かった。しかしこれではやはり、効果は期待できそうにないな」

「そ、そうですよね」
落胆した様子の良に、アン自身も気持ちが萎えてくる。
アンも夜な夜な試しては、呪文を唱えてみてガッカリしたものだ。
そんな彼女を横目で見、ふんと鼻を鳴らしてから良が呟いた。
「ま、試してみるだけ試してみるか」
はっと顔を上げたアンから無理に顔を背けるようにしながら、良は手をプラプラと振った後、前に伸ばした左手首を右手で掴んだ。
そして彼は、静かに目を閉じ呟く。
「異界に眠る紅蓮の炎よ……」
「え？」
それは、呪文の詠唱であった。
「我レ魔王也、我ガ契約ニ従イその力を示せ！」
「契約なんていつの間に」
もしかして、例の魔道書とやらに記されていた呪文なのかもしれない。
そう思い、舞を見るが、こちらは何だか頭痛を我慢しているような表情で、こめかみに手を当てている。
「グレーター・ブレイズ」
ついに出る。アンは身構えた。
「オブ」
が、詠唱はまだ続いていたようだ。がくっと体の力が抜ける。
「デスブラックファイヤー！」
良が吼えた！
「……」
そしてまるで予定調和のように、沈黙が響いた。
声をかけようか迷っているアン。呆れた表情の舞。良の足元へと歩み寄り、鼻をピスピスと鳴らすキク。
「イグニッショオオン！」
「あ、往生際が悪い」
気まずさを誤魔化すように、良が叫んだ。

しかし、やはり何も起きない。
呪文は格好良かったですよ。と、アンがとりあえずフォローしようかしらと口を開いた瞬間。
ゴトリ。と、音がした。
何事かとアンが周囲を見回していると。
「よっしゃぁぁぁ！！」
良がガッツポーズを作り、歓声を上げていた。
「え、なに、何が起きたんですか？」
問いかけると、彼は感極まったのか目頭を押さえながら、先程まで掌を向けていた机の上を指差した。
そこにはペットボトルと言ったか透明な容器が一本。それが倒れて中身がトクトクと零れていた。
「た、大変。良さんこれ倒れちゃってますよ！　雑巾雑巾！」
アンは慌ててテーブルに駆け寄ると、良に呼びかけた。しかし彼は芝居がかったボーズでバッと手を振ると、彼女の言葉を否定する。
「違う！　倒れたのではなく俺が倒したのだ！　この魔法で！」
「え、魔法？」
聞き返しながら、とりあえずペットボトルを立て直そうと手を触れる。
「ひぅっ！？」
すると指先に異様な感触がし、アンは慌てて手を引いた。。
「な、なんか今ヌルっとしました！」
ペットボトルの底に、何やら半透明のヌルッとした物がこびりついていたのだ。
どういうこと？　とアンが良に当惑の視線を向けると、彼は腕組みをしながら高笑いを始めた。
「フハハハ！　つまりその液体は、摩擦係数を限りなくゼロにするほどの強力なグリースなのだ！　しかも物体と物体の間に割り込ませることができる！　それが机の僅かな傾きに反応し、その安定性の高いペットボトルを事もなく倒れさせたのだ！」

「はぁ……」
笑いながら良は解説をするが、彼のはしゃぎように若干引いているアンにはよく理解できない。
すると、同じような表情をしている舞が、テーブルへと近づいてきた。
「呪文名から察するに間違いなく意図した魔法じゃないのに、よくそこまで解説できるねお兄ちゃん」
ていうかペットボトルの蓋開けっ放しにして置かないでよ。などと文句を言いつつ、彼女はテーブルを覗き込む。
「うっわぁ、何か気持ち悪ぅい。えーと……ペロリ。何だろこれ、甘苦いね」
「フハハハハハ！　この魔法はゼロリバースと名づけるかゼログリップと名づけよう！」
気持ち悪いと評した物を平然と指で掬い舐める妹と、今使った魔法に早速名前をつけ始める兄。
なんだろうこの兄妹。自分ってさっきこの人達の言葉で感動したはずよね。
ペットボトルを流し台にもって行きながら、アンは何だか涙が出そうになった。
「よぅし、我が妹よお前も何かやってみろ！」
「アイサー」
アンが雑巾を用意している間にも、兄妹は話を進めている。
「使いたい魔法を強くイメージするのだ！　すると！」
「違う魔法が出るんでしょ？　どうすればいいのかな、アンお姉ちゃん」
すっかり魔法の講師気取りの良を無視し、雑巾でまずはテーブルから拭き始めたアンに尋ねる舞。
「え、えーと、目標を見つめて集中しつつ、深くゆっくり魔力孔で呼吸するような感覚を持ちながら、落ち着いて出すと良いらしいです」

いいのかなと思いながらも、アンは姉に聞きかじった知識を、彼女に教えた。
「分かった、やってみる」
頷くと、舞は数回深呼吸をした後、良しと呟いて呪文を唱え始めた。
「異界に眠る紅蓮の炎よ……」
「おい！」
詠唱をそのまま使われた良が、抗議の声を上げる。
しかし、アンには見えた。舞の周囲に懐かしきラーナの淡い緑光が浮かび上がるのを。
そうか。この世界のラーナはあちらよりずっと薄いのだ。それが集まるとこうやって目に見えるようになって……。
「良さん伏せて！」
「へ？」
嫌な予感がし、アンは自らもしゃがみながら良に叫んだ。
同時に、舞の魔法が完成する。
「デスファイヤー！」
ボン！　叫びと共に、良と舞達の中間辺りに火の球が出現した。アンが両手でやっと抱えられるほどの大きさで、表面を火の粉が踊っている。
「で、出たぁ！」
一番驚いているのは、出した張本人である舞であった。彼女が慌てて体を捻ると、それに合わせて中空の火球が踊る。
「ば、バカ何出してんだ！　早く仕舞え！」
「し、しまうってどうやって！？」
頭を抱え伏せた良が舞に叫ぶ。しかし彼女自身も混乱し、どうして良いか分からないようだ。
もちろんアンも、出しかけた魔法を中断する方法など知るはずがなかった。
自分のせいで大変なことになった。　どうしようと混乱する頭の

中で、ふと閃き、アンは良に叫んだ。
「良さん、キクちゃんを近づけてください！」
「え、あ、わ、分かった！」
アンの声に、良が頷く。
彼は隣で自分の真似をし伏せていたキクを拾い上げ、火球に投げつけた。
途端。
パァン！　と音がして、火球が弾け飛ぶ。
飛んできたキクを慌ててキャッチするアン。
ドラゴンの持つ、自らを傷つける魔法を無力化する特殊能力の効果である。
しかし自分は近づけろと言っただけなのに、躊躇いなく炎の中に投げ入れるとは。
やはりこの男、天性の魔王なんじゃないかしら。
アンは腕の中にいるキクと顔を見合わせる。
「やったー！　魔法使えたー！」
そんな彼女達に構わず、舞が嬉しそうに部屋中を飛び跳ねた。
呪文を唱える前は冷静に見えたが、やはり彼女も魔法を使いたかったらしい。
普段は背伸びをしている様子の舞が年相応にはしゃぐ姿を見て、アンは微笑ましく思った。
「今のは使えたとは言わんだろ！」
「でもお兄ちゃんと違って、思った魔法出せたもんねー」
「んだと！？　あれは詠唱フェイントと言う高度なテクで……」
「あ、お兄ちゃんそこ燃え移ってる」
「のわーーー！」
舞に食って掛かる良が、彼女の指摘でカーペットに燃え移った火を必死で消す。
異世界人に、自分には使う事のできない魔法を使われた。
彼らに教える前、それはもっとショックな事だと思っていた。

しかし今、魔法を使えるようになり喜ぶ彼らを見ても、アンの胸には思ったほどの嫉妬も憂鬱も沸いては来ない。
それどころか、教えて良かったという喜びが胸を満たした。
何故だろう。考えてはみたが、明確な答えは浮かばなかった。
「この家って、本当に壊れてばかりですね」
「大元の原因のお前が言うな！」
まぁいいか。楽しいし。
魔王に魔法を教えてしまったというのに、アンの胸には爽やかな気持ちが広がっていた。

VS勇者

アンが良達に魔法を教えてから一週間後。
風呂から上がったアンは、息をつきながら階段を上がっていた。
初日からの流れで、舞とずっと一緒に入浴しているのだが、いい加減あのスキンシップはやめてくれないだろうか。
「しかも自分がのぼせちゃうし……」
そんな訳で舞は、バスタオル姿で居間のソファーに寝ている。
もう寝てしまおうか。それとも舞に借りた本でも読もうか。アンはそんな事を考えながら足を動かす。
彼女が現在読んでいるのは、この世界の流行ファッションや漫画等が載っている「カチューシャ」という本だ。
月刊誌であるそれをバックナンバーから辿って読んでいるのだが、その中でもアンは、地味な女の子の前にイケメンロック歌手が現れて恋人になってしまう話が好きだった。
イケメンロックの意味はよく分からないが、勇者様が自分を迎えにくる事をよく夢想していたアンとしては、主人公にとても共感できる。
新たに増えたギタリスト、ドラム、シンセサイザーとの関係も気になる所だ。
要するに勇者様と魔法使いと僧侶と戦士に同時に告白されるようなものよね。どうしましょう。
意外にミーハーであるアンは、そんな想像をして一人悶えた。
「まぁ、私が同居してるのは魔王様だけど……」
それも見習いというかそれ未満の男である。
悪い人じゃないんだけどね。と、魔王としても男としても喜ばれない評価を件の男につけながら、アンが二階へと辿り着くと。
カッ。カッ。と、何かがぶつかるような音が聞こえてきた。
何事かと、アンが音のする和室を覗き込むと。

「あぁ、お前か」
悪くない魔王、良がノミを手に何かを突いていた。
「何をしてるんですか？」
「儀式の……準備だ」
近づき、手元を覗き込むと、良が顔の横に降ってきたアンのお下げを煩そうに叩く。
ごめんなさいと謝って、アンは彼の向かい側に座り直した。
風呂上りのアンのおさげは、普段のような両側に垂らす三つ編みではなく、ゆるく結んだ太い一本の物となっている。
シャンプーにリンス、ドライヤーというカガクの結晶のおかげで毛艶が増し、最近は櫛を通すのが楽しくて仕方ない。
「儀式って、異世界への穴を開くという例の」
「他に何がある。まったく、お前の所為でとんだ手間だ」
ぶつぶつと文句をいう良が持っているのは、円形の板だった。
溝に何やら紋章が刻まれており、貧乏な宗教家が使う聖印のようにも見える。
「これが儀式に使う触媒なんですか？」
「あぁ、ここの溝が緑色に染まっているだろう。この色は時間と共に溝を沿って広がっていくのだ。なのでこれが端まで染まったら魔道書の通りに次の溝を掘る。するとそのラインに色が付くので、それが端まで来たらまた彫る。この繰り返しだ」
丁寧に説明する良は、いつもより機嫌が良さそうに見える。
こういう細かい作業が好きなのだろうか。
微笑ましい気分で、アンはそれを見守った。そして彼が話し終えた所で、ふと思いつく。
「へー、溝が……あ、これってもしかして癒樹ですか？」
「癒樹？」
「えーっと、自らの傷を、大気に漂うラーナを集めて癒す木です。その性質を利用して、傷薬とか秘薬を作るのに使われるんですよ」
アンの家の三軒隣にも、その養殖を生業とする人間がいたのでよ

く覚えている。
そうか、この世界にはないのか。首を捻る良に説明すると、彼は「ほぅ」と息を漏らし、興味深げに印を眺めた。
「ではこの緑のラインは、魔力が凝縮したものか」
要するに、こちらの世界の人間に足りない分の魔力を、これを媒介にして補おうという事だろうな。などと考察する良。
彼が自分の世界を理解したのが少し嬉しくて、アンは笑顔で頷いた。
「はい。ラーナに触れさせすぎるとそれを消費して傷を治してしまうので、普通は上に特殊なニスを塗るんですけど」
「うむ、それも後で塗らなければな。上級異世界ゲートセットの場合スプレーなのだが、三万も余計にかかるので手が出せなかった」
アンがおじさんの仕事を思い出しながら尋ねると、やはりニスもあるらしい。
頷きながら線をなぞる良。彼の話では、確かに時間をかけ過ぎると印から線が消えてダメになってしまうのだそうだ。
「あの、前から気になっていたんですけど、良さんってその魔道書と道具一式をどうやって手に入れたんですか？」
この世界において魔法が一般的な技術ではないことは、アンにもとうに理解できている。
ならば良はどうやって魔法という力を知り得、儀式を執り行うことが出来たのか。
アンが問いかけると、良はぽつりと答えた。
「通販」
「つ、つう、はん？」
短すぎる答えに、アンは唖然となる。
そんな彼女の表情を見て、良は一旦印を新聞紙の上に置くと説明を始めた。
「お前がよく読んでいる雑誌の裏側にも書いてあるだろう。ここに電話して金を払うとこんな物と交換しますよと言う奴だ。というか

お前、ああいう雑誌ばかり読むのは感心せんぞ。間違いなく、偏った知識が身につく」
後半はただの説教である。なるほど。と納得しつつ、アンはそれはそれとして思いついた事を言った。
「良さんって、お父さんみたいですね」
「な、何を言う！　俺はお前のボケがこれ以上進行されては困ると思ってだな！」
慌てふためく良がおかしくて、アンはくすくすと笑った。
風呂上りでも無いのに顔を赤くした良が、視線をそらしながら呟く。
「……俺も適当にサイトを巡っていて、偶然見つけただけなのだがな。シャレで買ってみたが、まさか本物だとは」
「探していて見つけた訳じゃないんですか」
「まさか。本当に異世界などあるとは思っていなかったからな」
「ふぅん……そうなんですか」
少し不思議な気がする。良も舞も、アンの世界について大よその知識を有しているのに、その存在は信じていなかったと言う。
あのテレビの中の人を動かすあのゲームというものや、アンも読んでいる漫画などで得た知識だという事は聞いたが、ならばそれを作った人達は自分のようにあちらの世界に行った事があるのかしら。
それなら何故あちらには、この世界のことが伝わっていないのだろう。
もしかして都会ならこちらの世界と交流が盛んになっていたりして。アンはそんな事を考えてから、意識を目の前の良に戻した。
「そういえば儀式って、後どれぐらいでできるようになるんですか？」
尋ねると、良は電燈に板を透かすようにして見ながら答える。
「このペースだと、あと三週間ほどだな。前回よりも溜りが早い」
「三週間……ですか」
その返答に、アンは複雑な表情を浮かべた。

「なんだ。これ以上は縮まらんぞ。……そもそもの原因はお前なんだからな」
「い、いえ、そうじゃないんです。私なんて誰も心配してないでしょうし」
言ってしまってから、良が顔を曇らせた事に気づく。
「あ、あの、良さん？」
しまった。そんな事を言うべきではなかった。アンの胸に後悔が沸く。
「ごめんなさ――」
「悪かった」
謝ろうとしたアンの声に被さって、信じられない声が耳に届いた。
一瞬、呆然となってからアンは理解する。
「あ、良さん。今久しぶりに誤翻訳が出ました。何と良さんが謝って……」
「謝ったんだよ！」
「えぇ！？」
完全に通訳魔法の誤作動だとだと思ったのに、そうではないらしい。
アンは驚愕の声を上げ、信じられないまま彼に問うた。
「な、なんで良さんが謝るんですか！？」
「その、あまり言いたくない事を言わせたからな……この間、魔法を教わった時にも」
「一週間も前の事じゃないですか……」
「うるさい！　タイミングが無かったんだよ！」
アンがつっこむと、良は真っ赤になって彼女に言い返した。どうやら彼は、その事をずっと気にしていたらしい。
「ふふっ」
「な、なんだよ。じゃない、なんなのだ……」
不器用な彼の優しさを、アンは嬉しく思う。
舞にしてもそうだ。彼らはアンに良くしてくれて、そして彼らと

過ごしたこの世界は楽しかった。
だからつい、アンは口に出してしまった。
「その、だから全然気にして無いです。むしろ、もうちょっと長くここに居たいなぁって」
伺うように、チラリと良を見る。催促をした訳ではない。そうではなく、それを言ったら彼がどんな表情をするか、それが見たかった。
しかし良はむぅっと唸り、仏頂面をしたままである。
二人の間に妙な沈黙が落ちた。
それから、アンは自分の言った事に気付いて慌てて訂正を入れた。
「な、なんて、無理ですよね！　あはは」
「あ、当たり前だ！　お前のようなごく潰しをこれ以上養っていられるか！」
予想していたリアクションだったが、そう声高に言われると腹が立つ。
先ほどの沈黙が妙に照れくさくもあり、それを誤魔化すためにアンは声を張り上げた。
「りょ、良さんだって一日中家でゴロゴロしてるじゃないですかぁ！」
「俺は夏休みだから良いんだ！」
指摘するが、良は胸を張り、むしろ誇らしげだ。
夏休みとは、要するに暑過ぎて身が入らないから長期休暇をとりましょうという仕組みらしい。
良も舞もそのおかげでここ数日、買い物以外はずっと家にいるのだが。
「舞ちゃんは家事とか手伝ってくれるのに、良さんは全然手伝ってくれないし」
「お前に召使いとしての自覚が芽生えるよう、ワザとゴロゴロしているのだ！」
「良さんはいつもそんな子供みたいな事を言って！　この前もせっ

かく作ったシチューをニンジンだけ舞ちゃんに押し付けてたじゃないですか！」
「うるさい！　人間は嫌いな物を無理に好きになる必要は無いのだ！」
ましてや俺は魔王だからな。と開き直る良。
ニンジンが弱点の魔王など、誰にも恐れられないと思うのだが。
色々と彼の将来が心配になり、アンは忠告してみる事にした。
「好き嫌いばっかりしてると、勇者様に退治されちゃいますよ」
「子供用の脅し文句か！？　つうか何食おうが退治しに来るだろアイツ！」
良が子供みたいな文句を言うから、自分も子供を注意するように諭したのに。
憤慨する良に、アンもまた頬を膨らませた。
……アンの村では、実際に子供を叱る際、そのような脅され方がよく使われていた。
もっとも、普通は「悪い事をしていると魔王に攫われちゃいますよ」なのだが。
「というか、勇者なんて本当にいるのか？　困っている人間を無償で倒して世直し、なんて人間が」
「いますよ！　あ、いえ、何で倒すんですか！？　勇者様は人を助けるんです！」
発言を慌てて訂正するアンに、良がにやりと笑った。
本当に悪戯好きの少年のようだ。アンは膨らませた頬から息を抜く。
「ふん、信じられんな。そんなお人好しがいるなどと」
「本当にいるのに……だって私、会った事ありますもん」
「はぁ？　なんでファンタジー一般人のお前が、勇者なんてものと知り合う機会がある」
アンが呟くと、良は胡散臭げな視線を余計に強めた。
何故この人は私の言うことをいつも信じてくれないのだろう。

くやしくなって、アンはその時の事を必死で話し始めた。
「あれは、私が十歳の春を迎えた時でした。私は水を汲みに村の入り口まで行ったんです」
その時の情景が、アンの頭には今でもはっきり浮かぶ。
当たり前だ、憧れの勇者との邂逅なのだから。
「するとそこに、質素な服と片手に棍棒を持った見慣れない方がいらっしゃって」
「まさかそれが勇者か？　不審人物じゃなく？」
話の途中で良が口を挟む。その目は不信を通り越して可愛そうなものを見る目に変わり始めていた。
「そ、そうですよ！　その頃はまだ駆け出しだったので、きっとお金が無かったんです！　その、私だってそれが勇者様だって知ったのは、後で皆が話してるのを聞いてからでしたけど」
よくよく考えれば、現在もそうだがあの頃は魔王が世界侵略をしていた時期である。
それを服一枚棍棒一本の一人旅をしている人間が、普通の人間であるはずが無い。
良にそれが伝わるか心配であったアンだったが、彼は「なるほどレベル1だったのか」と妙に納得した様子で頷いて、アンに話の続きを促した。
「まぁ良い。それで？　まさか見かけただけじゃなかろうな」
「ち、違います！　ちゃんと話もしました！」
「どんな？」
尋ねる良に、アンは頭でその時の情景を思い浮かべながら語った。
あぁ、今でも思い出す。まだ肌寒い朝の空気の中、一枚の布に頭を出す穴を開けただけのような服を着た青年が、鳥肌を立てながら彼女に話しかけてきたときの事を。
そして自分は、彼に答えたのだ。
「勇者様がここは何と言う村ですか？　って水汲みをしている私にお聞きになったので、私は『ここはアチューンの村です』って答え

ました！」
言い切り、どうだとばかりに胸を張るアン。なんたって勇者と話したのだ、これには良も驚くだろう。
ちらりと彼の顔をうかがうと。
「……ぷっ」
良が、噴出した。
「ぶあはははは！　お前それじゃＲＰＧの村人Ａだろうが！　まさかそこまで典型的だとは思わなかったぞ！」
「え、え、え、何で笑うんですかー！？　ちょっと、良さぁん！」
どうして彼が笑うのか、アンには理解できない。
「んもぅ……」
しかし、大口を開け楽しそうに笑っている良を見ていると、何だか自分まで楽しくなってくる。
あと三週間。とにかくこの世界を目一杯楽しもう。アンはそう決意した。

VSプール

「良さーん！　舞さーん！」
焼け付くような日差しの中。アンは手を振って二人を呼んだ。
「はしゃぐな。余計暑くなる……」
「まぁ、初プールなら、仕方がないよ」
遅れて良と舞が付いてくる。冷房に慣れきった二人の体では、この暑さは辛いようだ。
兄妹は同じようにぐったりとした様子である。
プールという場所に行こう、と言い出したのは舞だった。
アンはその場所の事をよく知らなかったが、聞けば暑さも吹き飛ぶ場所らしい。
二週間ぶりの遠出という事もあって、ワンピースに麦藁帽子という格好のアンの気持ちは弾んでいた。
「で、どっちに行けばいいんでしょう！？」
「そこだそこ！　そこで止まれ！　何で目的地も知らんくせに先導しようとする！？」
目的地を通り過ぎそうになったアンを、良が止めた。
何故と聞かれても、夏の陽気のせいとしかアンには答えられない。
言われた通り足を止めると、そこは周囲を壁で囲まれた大きな建物であり、中からは楽しそうな歓声が聞こえる。
「ほれ、とりあえず券売機で入場券を買うぞ」
言いながら、良が建物の入り口の脇にある機械に硬貨を入れる。
「あ、それ私やりたいです！」
「ほんっとうに子供だなお前は」
アンがハイハイと手を上げると、良が呆れた顔をしながら脇に退いた。
アンがやって良いらしい。
意気揚々と機械の前に行くと、良が横から指示を出す。

「まずそこの女二人男一人ボタンを押せ。それから高校生二枚と小学生一枚だ。……いや、お前は中学生で良いか」
良が自分の体を下から上まで眺めてからそんな事を言うので、意味はよく分からないが高校生を二枚買う。
「あ、コラ中学生ボディ！」
出てきた券に、良が悲鳴のような声を上げる。やはり意味は分からないが不名誉な事を言われている気がする。
「良いじゃない。五十円しか違わないんだし」
後ろから舞の手が伸びて来、出てきたチケットを分けた。
受け取ったアンの手を取ると、舞は彼女を入り口へと引っ張っていく。
「やれやれ」
振り返るアンを、良がため息をつきながら見送っていた。

入り口で券を渡すと、そのまま奥の更衣室と書かれた部屋へ進む舞。
彼女に連れられアンが中へ入ると、沢山の女性が服を脱いでいる最中だった。
公衆浴場で見慣れた風景ではあるが、いきなり出会うとぎょっとする。
「あれ、これから行くのってお風呂なんですか？」
「んー、水風呂？」
言いながら、舞は奥へと進んでいく。
そして途中で曲がると、彼女は正方形の箱が集まった鉄製の棚の前に止まった。
舞はそこで鞄を開けると、ついてきたアンに何かを手渡す。
「はい。アンお姉ちゃんの水着。えへへ、私のお小遣いで買っちゃった」
言いながら、舞は照れ笑いを浮かべた。

「えぇ、わざわざ買ってくれたんですか！？」
「うん！　お小遣い残ってなかったからあんまり高いのは買えなかったけど」
広げてみると、まるで姉の服のような胸当てと下着の組み合わせである。
周りを見ると、幾人か同じような格好をしている女性がいた。
「こ、これを着て良さんと合流するんでしょうか？」
「うん、そうだけど？」
恐る恐る尋ねると、舞はあっさりと頷く。アンは姉と違い、そういった格好にはある程度抵抗を持つ方である。
もっと正直に言ってしまえば、恥ずかしい。
「あの、やっぱり嫌、かな？」
躊躇っていると、舞が上目遣いでアンを不安そうに見上げていた。
「い、いえ、この世界ではこれが普通なんですよね！　だったら大丈夫です！」
彼女が少ないお小遣いで自分にプレゼントをしてくれたのだ。嫌なはずがない。
そうだ、ここではこれが普通なのだ。
アンが自分に言い聞かせて握り拳を作ると、舞は笑顔で頷いた。
「じゃ、着替えよ」
そう言って、服を脱いでいく。
決意を固めたアンも、それでも少し恥らいながら同じように服を脱いでいった。
「さー、今日は泳ぐぞー」
早くも全裸になった舞が、伸びをしながら宣言する。
「え、泳ぐ？」
彼女の言葉を聞き、こちらはまだ下着姿のアンは硬直した。
「プールって場所はもしかして、泳ぐ所なんですか？」
「え、言わなかったっけ？　そうだけど、何か問題ある？」
大問題だった。

VSプール2

「そっか、アンお姉ちゃんって泳げないんだ」
「はい……」
良を待ちながら、アンは舞と並んで壁に寄りかかっていた。
目の前の溜め池では、人々が楽しそうに水に入りはしゃいでいる。
「ごめんね、そうだと知ってれば私、ちゃんと準備してきたんだけど」
「い、いえ良いんです。それにしても良さん来ませんね」
せっかく遊びにきたのに、舞の顔が曇るところなど見たくはない。
アンは少々強引に話題を変えた。
「あ、うん、そうだね。お兄ちゃんってば何……」
アンの意図を察したのか。一転しておどけた口調になった舞の言葉が、途中で止まる。
どうしたのかとアンが舞の視線を追うと、良がこちらへと歩いてきていた。
「あ、良さーん」
アンが手を振ると、そんな事せんでも見えとるわ。とでも言いたげに良の顔が歪む。
その肩には、中をくりぬいた車輪のようなものがかけられていた。
「あ、あれは？」
「浮き輪！」
アンが尋ねると、そう答えながら舞が良へと突撃していく。
そして彼の腰に抱きついて、臍に頬ずりしながら叫んだ。
「お、お、お兄ちゃんの気配り博士ー！　もう、今日は私が思いっきり撫でてあげる！」
「や、やめんかこそばゆい！　ていうか恥ずかしい！」
それを必死で引き剥がそうとする良。
彼女の喜びようが分からず、アンはそぉっと彼らに尋ねた。

「えーっと、それって何なんですか？」
「浮き輪だよ浮き輪！　これがあればアンお姉ちゃんも泳げるの！」
「そ、そんなマジックアイテムが！」
「マジック！　ではなく！　科学の！　産物、だ！」
苦労しながら舞を引き剥がしてから、良はアンにその浮き輪とやらを投げてよこした。
それを顔にぶつけながらキャッチするアンに、彼はため息をつきながら言う。
「お前のようなドン臭い奴なら有り得ると思ったが、案の定それだ。どうせ海もない田舎で育ったのだろう」
「み、湖ならありましたよ！　私は……泳ぎませんでしたけど」
顔をさすりながら、アンは言い返す。
湖はアンのお気に入りの場所だった。あくまで、足を冷やしたり水浴びをする為のものではあったが。
「何の自慢にもならんわ」
もちろん、良も湖の水の如く冷たくそう返す。
「お兄ちゃん、これを膨らませてて遅れたんだね」
「……ポンプも持って来るべきだったな」
「で、でもとにかくありがとうございます！　良さんって本当に親切……」
「新雪を踏み荒らすような行為が好きだよね」
「だからどういう例えだ！？」
またも良を怒らせる言葉、親切と言いかけたアンを、舞がフォローする。フォロー……した。
良ももはや諦めたらしく、彼女が何を言おうとしたかは察しつつも、それ以上追求しようとはしないようだった。
「ところでお兄ちゃん、何か言う事ない？」
その彼に、舞がアンの方をにやにやと見つつ尋ねる。
「は？　え、あぁ」
言葉に詰まりながら、その意図を察したらしく、良がアンを見る。

彼女が着ているのは、ピンクを基調としたビキニというもので、何といつもの乳当てにある肩紐がない。
舞はバンドゥタイプとか何とか呼んでいたか、要するに布を真横に巻いたような状態である。
それでも事前調査のおかげかアンの胸にはフィットしており、そうそうズレる気配はないのだが、やはり不安を抑えきれないアン。
下にはパレオという腰巻をつけ、普通の物より露出度は低いのだが、何故か下のほうは若干サイズがきつい。
私って平均よりお尻が大きいのかしら。アンは内心で涙を流した。
そんなアンの体を、良は盗み見るようにチラチラと見ている。
何だか無遠慮に見られるよりずっと恥ずかしい。
アンは剥き出しの臍を慌てて隠した。
「俺は雷か。……まぁ本体の地味さを水着がカバーしているのではないか？」
もう見ないぞ。という意思の象徴なのか。良が露骨に顔を逸らしながら言う。
「何で素直に似合ってるよって言えないかなぁ」
そんな良に呆れ顔をする舞だが、アンには彼のそんなリアクションが引き出せたことのほうが嬉しかった。
「えへへ、大丈夫です。私、良さんの言葉は良い方に考えるようにしてますから」
「お前も段々図太くなってきたな」
アンが照れながらも精一杯微笑むと、良が露骨に嫌そうな顔をしてそう呟いた。
「うん、それがいいよ。あ、お兄ちゃん私は？」
楽しそうに頷いた後、舞は次に自分の水着の感想を求めた。
「ナンパされたりしたら即逃げろよ。お前に興味があるって事は間違いなく変質者だ」
「ぶぅー」
碌でもない感想を言われた舞は頬を膨らませる。

彼女の水着は黒地に白い水玉の、確かワンピースという水着で、こちらは腰に短いスカートのような物がついている。
一見子供っぽいそれだが、股のV字のカットが割ときわどい事を知っているアンは、舞に似合いの水着だと考えていた。
「わ、私は凄く可愛いと思いますよ」
多分、兄に気に入られようと厳選した水着だろう。
舞の葛藤を知っているアンは、彼女を慰めた。
「わーん！　やっぱりアンお姉ちゃん大好きー！」
「ひゃっ」
すると舞は、今度はアンに抱きつき、その臍にぐりぐりと顔を押し付けてきた。
「お前ら、毎日一緒に風呂に入ってると思ったら、いつの間にかそんな関係に……」
良が一歩引き、妹の性の歪みが信じられないような口調で呻く。
風呂での事を思い出すとあながち間違ってはいないので、否定できないアン。
「体はお兄ちゃんに調教されても、心はアンお姉ちゃんの物だよー」
「お前らの爛れた関係に俺を巻き込むな！」
「どちらかと言うと私が巻き込まれているような……」
舞のスキンシップは、良に撫でられない欲求不満が原因な訳だし。
そうは思ったが、良は舞の病気についてあまり正しく認識していないようだし、アンもどちらをどう正せば良いのか分からないので言わないでおいた。
ついでに流石に周囲の視線が痛くなってきたので、舞を引きずりながらアンは隅へと移動する。
それについてきた良が、首を回しながら彼女に告げた。
「とりあえず、準備運動をしてから入るぞ」
「え、ここで胸を揉むんですか！？」
「そっちの運動じゃねぇよ！　ただの準備体操だ！」
ここで魔力開放運動をするのかと勘違いしたアンの声を掻き消そ

うとするが如く、良が叫ぶ。
ちなみに魔力開放運動の方は風呂上りに継続中であり、年齢層がバラバラの男女がそれぞれ自らの乳を揉むという異様な光景が夜な夜な展開されている。
アンが付き合う必要はないと言えば無いのだが、まぁこの世界の食べ物はとても栄養があるらしいし、乳当ても買ったし……という訳で彼女も参加していた。
「準備体操……って、どうすればいいんでしょう」
「あぁもう。俺の真似をすれば良い！」
首を傾げるアンに、良はじれったそうに叫んだ。
彼が体を動かし始めたので、アンはそれを真似て準備運動とやらを行う。
五分ほどそれを続けてから、ようやく良は良しと言い動きを止めた。
「はぁ、はぁ、こんな所だろう」
「結構入念にやるんですね」
「お兄ちゃんは心配性だから」
既に息が上がっている良が、額の汗を拭う。水着の裾を直しながらアンが聞くと、途中から手を抜いていた舞が苦笑した。
「バカ言うな。この女は水に入った途端足攣って、シンクロ的なポーズで死にかねん。だからこれでも足りないぐらいだ」
「そういうの心配性って言うんだと思うんだけど」
「あ、お前水に入るときはちゃんと胸に水を当ててからにするんだぞ！　お前の場合八十パーセントの確率で心臓麻痺を起こすからな！」
「そ、そんなに高いんですか！？」
「気にしなくて良いよー。お兄ちゃんはちょっと病気なの」
ビックリするぐらい信頼されてないけれど、まぁ少なくとも突然死なれても嫌とは思われているって事よね。
アンは自分にそう言い聞かせ、プールサイドに移動すると、良が

するのを真似て胸に水をかける。
「ほれ、浮き輪だ」
良に再びそれを投げられ、再度顔にぶつけつつ受け取るアン。それから彼女は決意を固め、良を見上げた。
「上に立てばいいんですね？」
「違うわ！　その穴にお前の体を通すの！」
「ごめんお兄ちゃん。私もちょっと気持ちが分かってきた」
つっこむ良と、それに同調する舞。
これって異世界の壁かしら。そんな風に思いながらも、アンは言われた通りに浮き輪とやらに体を通す。
そして、ドボン、と着水。
来るべき顔への水襲来に備え、ぎゅっと目を瞑るが……それが来ない。
アンは恐る恐る目を開けた。すると――。
「浮いてる！　浮いてます！」
あまりの感動に、アンは声を上げた。
水に入れば即座に沈んだ自分の体が、今は足をつけずに水中を漂っている。
「……あまりはしゃぐと、この場所からも浮くからやめろ」
「って、わ、わ、なんか流されてます！」
「流れるプールだからねー」
同じくプールに入った兄妹が、彼女の傍に寄って浮き輪を抑えた。
「だ、大丈夫なんですか？　あまり流されると滝壷に……」
「そんなデンジャーな場所ではない」
彼らの話によると、水の流れを人工的に作っているだけで、流されても滝や河口に付く訳ではなく同じ場所にぐるりと戻ってくるらしい。
回転寿司みたいなものだと良は説明したが、アンにはよく分からなかった。
そうして流れるプールとやらを三周ほどした頃だろうか。

浮き輪の上に足を出す方法も教わり、上機嫌で足で水面を叩くアンに、舞が尋ねた。
「アンお姉ちゃんって、まるっきり泳げないの？」
その質問に、アンの顔が曇る。気にしない、と決めたはずだったが、やはり落ち込む気持ちは止められなかった。
「あ、はい。魔力孔がありませんから……」
魔法が使えない人間というのはこういう所でも損をするのだ。ぱしゃぱしゃと水面を叩く足の勢いが、アンの落ち込みと共に弱まった。
「何か関係あるの、それ？」
そうやって顔を俯かせたアンに、舞が不思議そうに尋ねた。
「え？　だって魔力孔が無いと水に浮かないじゃないですか」
言い返して、アンは何かがおかしいと気づいた。
先程から舞は平泳ぎとやらを披露しているが、彼女はこの間まで魔力孔さえ知らなかったはずで……。
「そうなの、お兄ちゃん？」
そんな彼女が、泳ぎながら良に問いかける。
「人間が水に浮くのは、水より密度が低いからだ。魔力などはいっさい関係ない」
すると、問いかけられた良が半眼で答える。
「えぇ！？」
俄かには信じられず、驚愕の声を上げるアン。前半はさっぱり意味が分からないが、後半は彼女の常識とまるで違う。
「信じられないなら、そうだな」
すると良は、意地の悪い笑みを浮かべると、浮き輪に座ったアンにゆっくりとにじり寄る。
「な、何ですか良さん。何か凄く嫌な予感がするんですけど」
悪寒を感じ、アンは手で水をかき彼から逃れようとするが、水の流れに逆らう形になりむしろその接近を助けてしまう。
「フハハハハ、自分の身で体感しろー！」

高笑いを上げ、良が浮き輪をひっくり返した。
視界がぐるりと回転し、アンの体は水中へと没する。
急いで水面へと戻らなければ、しかし体が動かない。
気付けば大変、浮き輪にお尻が引っかかってる！
もがく彼女の尻を、誰かが上から押した。
それでようやく体が自由になり、アンは慌てて目の前の物に縋りつきながら体を水面へと引き上げた。
「な、バカ、そんなに慌てるな！　足なら余裕で付くだろう！」
「いやーーー！」
「ちょ、やめろ！　ど、どこを引っ張っている！？」
「お、お兄ちゃん水着！　アンさんも！」
舞が叫ぶが、それどころではない。
アンは必死でそれに昇り、しがみ付く。
「あぁ！　二人が公衆の面前でやっちゃいけないような格好にー！」
両足をも使って抱きついた物の正体と自らの格好にアンが気づいたのは、それから数分後の事だった。

VSプール3

「この世界の衣服は、無防備すぎると、思うんです」
顔を必死で上げながら、途切れ途切れにアンは主張する。
彼女の手を取りながら、良は呆れた顔をしていた。
「いーから集中して泳げ。ただでさえ尻が重いのだから沈むぞ」
「そういう、デリカシーのない発言も、どうかと思います！　というか浮き輪に引っかかった時お尻触ったでしょう良さん！」
「アレは緊急措置だ！　というかそんな事を公衆の面前で騒ぐ奴がデリカシーとか主張すんな！」
罵りあいながら、良が手を引きつつ後ろ歩きをするのに合わせ、アンはバタ足で進んでいく。
「いっちにーいっちに」
それを楽しそうに眺めつつ、舞が出鱈目なリズムを刻む。
水泳の練習は、ひとまず好調であった。
最初は水に浮く事さえできなかったアンだが、今はバタ足を休んでも体が浮く事を知っている。
例えどんなに尻が重くても、だ。
顔を水につける事はまだ少し怖いが、良がそれを忘れる程度にスパルタでしごく為、徐々に慣れていっている。
自分が泳げるはずがない。そう思い込んでいたはずのアンだったが、一時間も経てばこの通り、泳ぎながら文句まで言えるようになっていた。
……魔力孔が無い人間は水に浮く事ができない。それを姉から聞いた時、アンはそうなんだと簡単に納得し、以来確かめようともしてこなかった。
だが、それは間違いであった。
他にも、こんな事、あるのかな。
アンの頭にそんな言葉が浮かぶ。自分が勝手に諦めていただけで、

他にも色々できた事があるのではないか。
「おい」
ふと、そんな思考に沈みそうになったアンを、良が呼び戻す。
気付けば、バタ足が完全に止まり、アンは良に引っ張られるままになっていた。
「アンお姉ちゃん疲れた？　そろそろ休憩時間だから早めに休もうか？」
「まったくお前は、もっと自分の限界をだな……」
心配そうに、舞が顔を覗き込んでくる。良もアンが無茶をしたのだと思って渋い顔である。
大丈夫ですと慌てて答えてから、アンは別のことに気が付いた。
「そういえば良さんって、私の名前を呼んでくれたこと無いですよね」
「な、何だ、藪から棒に」
突然のアンの言葉に動揺する良。繋いだ手にぎゅっと力を篭めながら、アンはプールの底に足をついた。
「だって、私に呼びかける時はいつもおい、とかお前—とかなんですもん」
「い、良いだろうが別に。俺がお前をどう呼ぼうが勝手だ！」
「またお前って呼んだ！　ちゃんと呼んでくれないなら私だってこれから良さんの事ヘイヘイって呼びますよ！」
「なんでそうなる！？」
「魔王ヘイヘイ。良いんじゃない、楽しそうだし」
「そんな威厳の無い名前、断固断る！」
茶化す舞に、良は叫び返す。それはそれで可愛いと、アンは思うのだが、彼が嫌がっているなら説得は別の機会にするとして。
「じゃぁアンって呼んでください」
今の重要項はこちらである。まっすぐに良を見つめ、彼に訴えかける。
「ぐぬぬぬぬ……」

唸る良だったが、アンが手を離さないのを察し、ついに口を開いた。
「ア……」
そして、言いながら繋がれた腕を広げ、アンに体を寄せてくる。
え、名前を呼んでとは言ったけれど、いきなりそんな事……。
動揺するアン。
その足首を、良が自らのかかとで払った。
「あっぶ！」
体が水に沈み、いきなりの凶行に驚いたアンは、思わず手を離してしまう。
アンが水面から上がり、顔をごしごしと拭っていると、その間にプールから上がった良が振り向いて一言。
「アホが！　絶対に名前なんかで呼ぶものか！」
そうして彼は、どこぞへと走り去ってしまった。
監視員が良を注意する声が響く。
「な、名前で呼ぶってそんなに恥ずかしい事なんですか？」
「お兄ちゃんはまぁ、純情だから……」
唖然としながらアンが尋ねると、同じく流石にビックリしたらしい舞が顔を見合わせる。
異界の男の子ってやっぱり分からない。などと考えながら、アンは首を捻ったのであった。

VSキクVS舞

プールに行って数日後。
「あ、キクちゃんごめんなさい」
足元にいたキクを、洗濯籠を抱えたアンは跨いで居間に入った。
ドラゴンを跨ぐなどこちらに来るまでは考えられなかった事だが、今では自然に行える。
「踏んじゃっても良いのに」
ソファーに寝転がって雑誌を広げる舞は、そんな事まで言い出す始末だ。
「流石にそこまでは……」
キクはキクで、アンに跨がれても視線をちらりと向けるのみだが、流石に踏まれれば竜としての本性を露にするだろう。
いや、竜だからアンが乗ったぐらいではビクともしないはず。でも最近私太ったような気もするしどうだろう。
……この世界の食事が美味し過ぎるのがいけないんだ。
などと考えこんでいたアンだが、やっぱり踏むのはいけないだろうという結論に達した。
「ダメですよ。キクちゃんとも仲良くしなきゃ」
「だって、キクってば昨日もずぅっとお兄ちゃんの膝の上に居てさ。お兄ちゃんも気まぐれに撫でるもんだから調子に乗っちゃって。とんだ雌竜だよ！」
「個性的な罵り方ですね」
舞はキクが嫌いらしい。その原因はキクに兄の手を独占されているからのようだが。
ちなみにその兄だが、現在はトイレで奮闘中である。
原因はアイスの食べ過ぎによる腹の冷やし過ぎで、そんな魔王に世界を支配される事を考えると、アンは別の意味で恐ろしかった。
と、そこで、アンは遅まきながら舞の発言に違和感を覚える。

「あれ、キクちゃんって、雌なんですか？」
舞はキクが雌であると確信しているようだ。あちらの世界出身である自分すら、ドラゴンの雄雌など分からないのに、彼女はどこで見分けているのだろう。
「間違いなく雌だね。お兄ちゃんに媚びる表情で分かるもん」
それに対し、舞は当たり前のようにそう答えた。どうやら、女の勘といモノらしい。
しかし良を巡って喧嘩をしている二人を見ると、それも正しい気がしてくる。
女の戦い。とりあえず自分の人生には関係ないものだったな、と考えて、アンはふと今まで疑問だった事を舞に尋ねてみる気になった。
「そういえば、私は良いんですか？」
「何が？」
「私のせいで舞ちゃんと良さんが連れ回されることも多いですし、舞ちゃんは髪を洗ってもらうのを楽しみにしたっていうのにお風呂は私とですし」
これではキクより余程恨まれそうなものだが。
アンが問うと、舞は雑誌を手放し唇に手を当て、天井を見ながら考える仕草を見せた。
それからアンと目線を合わし、言う。
「アンお姉ちゃんの事、好きだから」
彼女の答えに、アンはざっと体を引いた。
思わず踏みそうになったキクが慌てて飛びのく。
そんなに必死で逃げなくて良いのに。私ってキクちゃんにまで重いと思われてるのかしら。などとアンは唇を尖らせた。
それをケラケラと笑ってから、舞は語りだした。
「あ、好きってそう言う意味じゃないよ。二割ぐらいそういう意味も入ってるけど、でも私って、そこのアホ竜みたいにただお兄ちゃんに撫でられれば満足って訳じゃないの」

そう言ってキクと一瞬火花を散らし、彼女は言葉を続ける。
「お兄ちゃんが笑いながら撫でてくれるのが好き。楽しい時とか、褒めてくれる時とか、アンお姉ちゃんは、そういうお兄ちゃんを沢山引き出してくれるから」
一転、本当に、幸せそうに舞はそう呟く。アンも彼女の事は妹のような意味で好きなはずなのに、その表情を見ているとドキドキとしてくる。
「わ、私色々ミスをするので、そのフォローで舞ちゃんが誉められる事はありますけど、その、良さんを楽しい気分にさせた事なんて……」
「あるよ。いっぱいある。お兄ちゃん、アンお姉ちゃんが来てからよく笑うようになった。素直じゃないからちょっと分かり辛いけど」
「そう、なんですか？」
自分が来る以前の良を知らないアンとしては、まるで想像ができない。
どんな感じだろう。良の普段の顔といえば、渋さの無い渋い顔が思い浮かぶアンなのだが、案外それでちょうど良くダンディな顔になるのかもしれない。
アンが一通り想像の世界に浸り終え、舞に意識を戻すと、彼女が口元に笑みを浮かべたまま、少し寂しそうな顔をしていることに気づいた。
「私が、それをできないのはちょっと悔しいかな……。でも、だから、感謝はしてるけど邪魔だとか迷惑だとか、この毛色黒皮膚金腹黒のサンドイッチ伯爵雌竜！　だとかは思った事ないよ」
「あの、舞ちゃん。キクちゃんの毛が逆立って、その金色の皮膚が覗いてきているのでその辺りで……」
前半は中々けなげかつ嬉しい事を言ってくれた気がするのだが、後半の罵倒の所為で完全に台無しである。
おかげでアンは素直に礼が言えない。
それだけならまだしも、彼女はゆっくりと立ち上がったキクの視

線を遮る壁にならざるをえなくなった。
どうしようと内心汗を流しているアンの後ろで、トイレのドアが開く音が聞こえた。
「……そんな所で何を突っ立っている」
アンの気も知らずに、トイレから出てきた良が彼女にいつものジト目を向ける。
キクが良に言いつけようとしているが如く、後ろ足で立ち彼のふとももに手を置いて良を見上げた。
半ば習慣になっているようで、良はキクを抱き上げながら意味も無くよしよしと撫でる。
ネコであれば喉を鳴らしているような、気持ちが良さそうな顔で丸くなるキク。
舞はやはりムッとした顔をしたが、動物と張り合っても仕方ないと今更悟ったのか息を吐き、話題を締めくくった。
「アンお姉ちゃんがお兄ちゃんを奪いたいとか、奪って閉じ込めて煮ちゃいたいとか考えてるなら、話は別だけど」
最悪な締めくくり方だった。
「そ、そんなの考えた事ありません！」
アンが慌てて否定すると、舞は冗談、と微笑む。
何を言うのだろう。自分は良に、そんな猟奇的な感情を覚えた事はない。
「お前ら、俺をどうするつもりなのだ」
その部分だけ聞いた良に至っては、もはや顔が青くなっていた。
そんな良を、キクが慰めるように舐める。
「俺の味方はお前だけか」
「美味しいか確かめたんじゃないですか？」
「恐ろしい事を言うな！」
思いついてアンが言うと、怒られた。やっぱり自分は彼を怒らせてばかりな気がする。
「でも、食費が嵩む前に捨てた方が良いよその雌」

先程喧嘩になりかけたばかりなので自重しているようだが、やはり機嫌は良くないようで、キクをもはや雌呼ばわりしながら舞が言う。
「あ、竜って五百年ぐらいは食べなくても大丈夫だそうですよ。趣味で食べるだけで」
どこに捨てるのかという疑問もあるが、こんなに懐いてるのに流石にそれは可哀想だ。
そう思い、アンは舞を宥める。
そしてもちろん、アンの言っている事は事実である。おかげでアンも、キクの餌を特別に用意している事はない。
その日の余りや、賞味期限直前の物を与えているのみだ。
ドラゴンにそんな事をして実は恨まれてないかしら。今更ながらアンは不安になったが、まぁキクは人間が……というかドラゴンができている竜なので大丈夫だろう。
「げっ、何その反則。でも大きくはなるんでしょ？」
「それも自分の意思で何とかなるみたいです。その内、人化も覚えるそうですし」
食い下がる舞に答えると、彼女はもはや何も言えないようで顔をしかめた、。
そういう顔をすると良に似ている気がする。アンは微笑した。
竜が人になる。アンの世界では割とありふれた物語だ。それは絵物語ではなく、実際に竜の生態は、その人間の姿になった竜の話によって解明された物も多い。
美人や美形になる場合が多いのよね。　などとアンが考えていると。
「人間化か」
「あ、鼻の下伸ばした」
想像したのか、顔を緩ませた良に、舞が鋭く指摘する。
「まぁ、覚えるドラゴンも限られてて、それにしても五十年ほどかかるそうですけど」

「なんだ……」
「あ、ガッカリした」
次いでアンが補足すると、今度はこちらが見ても分かるぐらいに良は肩を落とした。
それから、こちらを見ていつものジト目になる。
何だろう、とアンが見つめ返していると。
「何で睨むんだお前ら」
「え、今私睨んでました？」
彼はそんな事を言った。
言われたアンは、ぐにぐにと顔を揉む。いやいやまさか。自分までキクに嫉妬するなんてそんな訳……。
「あぁ、舞と姉妹に見えたぞ」
「あ、今のってダジャレって奴ですか？」
「違うわ！」
「あはははは！」
不機嫌だった舞が、それで盛大に笑った。
しかし、不機嫌顔の舞と似ていたという事は良とも似ていたという訳で。
私ってこんな怖い顔してたのかしら。失礼にもそんな事を本人を目の前にしながらアンは考えた。
……一緒に生活していると顔が似るという。
だからきっと、良さんのそんな顔と似てしまったんだわ。
そう思いながら、アンは顔を揉み続ける。
キクはそ知らぬ顔で、良の腕の中、欠伸をしていた。

VS世界地図

「……何を読んでいるのだ？」
ある日の昼過ぎ、アンが居間で本を読んでいると、良に話しかけられた。
「あ、良さん。またアイス食べて」
「うるさい。俺が買ってきた物を何本食おうが俺の勝手だろう」
「またお腹を壊しますよ」
相変わらず昼間から怠惰な生活をしている良にアンがそう言ってやると、彼は先日の苦しみを思い出したのか、うぐっと呻いた。
彼から一本取れたのが嬉しくて、アンが良から顔を逸らし、くすくすと笑っていると。
「ひゃっ！」
背中にいきなり冷たい感触が走った。
慌てて振り向くと、良がアイスを傾けている。
どうやら溶けかけたそれを襟口からアンの背中へと垂らしたらしい。
「な、何するんですか良さん！　染みになったらどうするんですか！？」
まさに魔王である。信じられない暴挙に出た良にアンが抗議すると、彼は呆れたような顔で「所帯じみたやつめ」と呟いた。
それがくやしくて、アンは更に文句を言う。
「大体、食べかけのアイスなんて唾がついてるんですよ！？　今良さんは私の背中を舐めたも同然なんですからね！？」
「変態的な発想をするな！」
良にそう言い返され、アンははっと我に返った。確かに今の例えはおかしかったかもしれない。
良が自分の背中を舐めるなんて……その光景を思い浮かべてしまい、アンは更に赤面した。

「……」
良もまた、何か気まずそうに頭をかき、しばし沈黙が落ちた。
何だか変だ。彼と仲が悪くなったわけではないのに。
自らの気持ちに整理がつかずにアンが黙っていると、アイスを食べ終えた良が口を開いた。
「で、何を読んでいるのだ？」
冒頭のセリフである。そう言えばそう問いかけられたのだと思い出し、アンは胸の動悸を沈め、良に自らが読んでいた本のタイトルを見せた。
「世界観光ガイド？」
「はい、この世界の地図です！」
それは、舞が渡してくれた本の中にあった、この世界の地理と主要な都市の解説を載せたガイドブックというものだった。
首を捻る良に、アンは胸を張って答える。が、彼にはアンが何故誇らしげか分からないようだ。
「……お前も世界征服の野望にでも目覚めたか？」
「いえ、地名を見て、ここにどんな人が住んでいるか想像するだけで楽しいんです」
アンが解説すると、良はついには視点が九十度傾く勢いで首を捻った。良にアンの気持ちが分からないのも当然だろう。彼女自身も自分がなぜ胸を張っているか分からないのだから。
「相変わらずの妄想女っぷりだな。こんなつまらん世界より、お前の世界のほうが数倍楽しいだろう」
そんな彼女を、良は呆れた目で見てそう言った。
その言葉に、アンはむっとなる。
「良さんは、ブラジルに行ったことがあるんですか？」
「いや、無いが……どうせサッカーとコーヒーぐらいしかないだろ」
「そんな事ないです。ブラジルには世界遺産というものが十七件あ

って、中でもフェルナンド・デ・ノローニャの景観はとても素晴らしい物なんですよ」
「は、はぁ……」
勢いごんで話すアンに圧倒された様子を見せながら、良が向かいの椅子に座った。
「世界の事を全部見ていないのに、つまらないなんて言っちゃダメです」
良が、自らの世界をあまりよく思っていない事を、アンは知っていた。
だが彼が、この世界をつまらないと評すのは悲しかった。
何故なら――。
「私、良さん達と出かけた場所はみんな楽しかったです。良さんは、楽しくなかったですか？」
アンが見た世界は、どこも輝いて見えた。
未知の物で溢れていたからということもあったが、一番の理由は良達が一緒にいてくれたからだ。
自分が楽しんでいる間、良がつまらない思いをしていたのなら悲しい。
そう思い、アンが良の顔を伺うと。
「まぁ、そうだな。少なくとも、その、退屈はしなかったな」
目線をはずしてはいるが、若干朱の差した頬を見てそれが彼の照れ隠しであるということはアンにも分かった。
可愛らしい。同い年の男の子相手だというのに、そんな事を思ってしまう。
「きっと、世界には沢山素晴らしい場所があるんです。この世界にも……」
そして、自分の世界にも。俯きながら、アンは呟いた。
そんなアンの手を、唐突に温かい感触が包む。
彼女がびっくりして顔を上げると、良が真剣な瞳でアンの目を見つめていた。

「見たいか？」
「え、え？」
問いかけられるが、アンの胸中はそれどころではない。
先程まで照れて顔を背けていたはずの良が、いきなりこんな事をするだなんて。
手ならプールでも握られたが、あれは泳ぎの練習の為だ。そもそもあの時はこんな風に耳の横から血管の脈打つ音が聞こえるなんて怪奇現象は無かった。
エスカレーターで手を引かれた時もあったが、あの時も胸の動悸がした。でも今はもっと強い。
彼との思い出を思い出すたびに、何故だか動機は強まっていった。
良さんは？　この世界では手を握るなんてなんて事ないことなの？
そう思って彼の顔を見ると、良の顔もやはり真っ赤であり、アンを余計に狼狽させた。
「俺は親切でも、ましてやおせっかいでもない。だから、はっきりとしか聞かんぞ。お前はその、俺達ともっと色んな場所を見たいか？」
心臓の鼓動が最大限まで高まると、今度は逆に良の声が鮮明に聞こえる。というか彼の声しか聞こえない。
答えようとするが言葉が出ない。首を縦に振ろうとするが……それを良一色になりかけている心の隅っこに引っかかるものが邪魔をした。
それが何か。考えようとして、ようやく意識が良から逸れる。すると――。
「……っだいまー」
廊下から声がして、アンは慌てて振り返った。
彼女の仕草で良も正気に戻ったらしい、さっと手を離す。
それとほぼ同時に、舞が廊下から顔を出した。
「んもー外あっづいよぉ。登校日なんて無ければ良いのに」
ランドセルというらしい赤い背負い物を背負った舞が、胸元を無

防備にパタパタとあおりながら居間に入ってくる。
「あれ？　なんか二人も顔赤いよ？　クーラー利いてないんじゃない？」
そうして彼女は、アンと良の顔を見ながら問いかけた。その表情が若干ニヒルなのは、もしや一部始終を見ていたのではあるまいか。
「きょ、今日は暑いからな！」
「あ、あはは、そうですね」
誤魔化しながら、アンは自らの胸元をさすった。
さっきのは何だったんだろう。色々と。

VS電話

アン＝ノンマルトンがこの世界に来て三週間が過ぎた。
部屋の掃除も慣れた物で、一階の掃除を手早く済ませた彼女は、二階の掃除に精を出していた。
そこも今は一通りは終わっており、残すは普段掃除を断られている良の部屋と、そして和室を残すのみだ。
良さんも部屋の掃除ぐらい任せてくれれば良いのに。やはり物を壊されるとでも思っているのだろうか。
舞さんは思春期の男の子がどうこう言って、良に怒られていたっけ。
その様子を思い出し、アンは含み笑いを漏らした。
――それはそれとして、掃除をさせてもらえない部屋はもう一つあった。
一階の、階段の脇の部屋だ。
それの正体は、流石に三週間も一緒に暮らしているとアンにも察する事ができた。
多分あれは、彼らの両親の部屋だ。
アンは良達の両親に一度も会ったことが無い。
彼らの口ぶりからして健在ではあると思うのだが、それに触れるのは二人の間でタブーなようで、舞すらそういう話題になりそうになると露骨に話を逸らそうとする。
まぁ、話したくないのなら仕方が無いだろう。そう考え直し、アンは和室の戸を開けた。
「わぁ、いつ見てもすごい……」
いくら掃除をしても、あの日の傷跡は消せはしない。
壁と床（畳と言うらしい）には大穴と焦げ痕が生々しく残っている。
そして扉を挟んで部屋の反対側、窓側の隅にあるのはコタツとい

うらしい。
冬に入ると二度と抜け出せないほどの、舞曰くお兄ちゃんの指の次に気持ちの良い物らしいのだが、多分アンには味わう事ができないだろう。
少々センチメンタルな気分になりながら、アンはコタツをめくり上げる。
すると勢いよく持ち上げすぎたのか、天板が動いた。
慌てて抑えるアン。すると。
カタッ。と音が鳴って、天板と掛け布団の間から何かが落ちた。
「あれ、これは……」
拾い上げてみると、アンはそれが見覚えのある物体である事に気づく。
良がこの間弄っていた、癒樹の印章だった。
何故こんな物がこんな場所に。
考えて、彼女は思い至った。
そうか、これは前回の召喚で使ったものだ。既にニスも塗ってあるし、印も完成しているように見える。
良はこれを再利用できる事を知らず、また、あの日のどさくさで無くしてしまっていたのだろう。
これがあれば、もう一度儀式を行う事ができる。
そう考えた直後、アンはなんだか胸が痛くなった。
先程、冬には自分がこの家にいないのだと想像した時より、ずっと痛かった。
アンは印章を胸の前でグッと握る。
……とにかくこれは良の物だ。彼に渡そう。
そう決めたアンは、掃除機をその場に置くと、部屋を出た。

ゆっくりと階段を降りていく。すると、良の話し声が聞こえた。
舞は出かけているはずだし、一体誰とだろう。

「だから、彼女はそんなのじゃない！」
突然の大声に、アンの体がビクリと震えた。
どうやら良は、誰かと言い争っているらしい。アンの足が止まる。
「事情は話せないんだ。その、遠くから来た女の子で……」
相手方の声が聞こえない。電話というものだろうか。彼が何度か使っている所を見たことがある。
良が話しているのは、どうやらアンについてのようである。
だとしたら、彼が話しているのは……。
「母さん。だから、後一ヶ月で良いんだ。彼女を家に置いてくれよ」
アンが聞いた事がない、いつも威張っていたはずの良が出す気弱な声。
それに驚きながら、アンは考えた。
良さんの、お母さん……。彼女は、自分がこの家に居候をしている事を知らないんだ。
そして、良さんはお母さんに自分をもう少し家に、引いてはこの世界に置いてもらえるように頼んでいる。
でも、一ヶ月？　元々の予定でも、自分がこの世界にいられるのはあと一週間程だったはずだ。
アンの脳裏に、一週間程前、良と二人きりになった時のやり取りが蘇った。
彼は……もしかして自分がこの間漏らした、この世界にもう少し居たいと言う願いを叶えようとしてくれているのか。
「舞だって、彼女の事は気に入ってるし。その、悪い子じゃないんだ。ドジだし、世間知らずだし、無鉄砲だけど、悪い子じゃない」
良が、自分を庇っていた。いつも、一般人だとバカにしていた自分を。
嬉しい。という気持ちも嘘ではない。
しかしそれ以上に、アンは彼のいつもとは違う口調、声のトーンに何か居心地の悪さを感じ始めていた。
「もう良い！　それならこっちにも考えがある！　じゃぁな！」

やがて、話が平行線に陥ったのか。良がそう叫んだ。
ガシャンと音がして、荒い足音がこちらに向かってくる。
逃げよう！　そう決めた時には既に良が目の前に来ていた。
「あ……」
自分のドン臭さを呪いながら、アンは良と対峙する。
彼の顔にはいつもの不遜さが無く、それどころか、ばったり出会ったアンにすまなそうな表情すらしていた。
それを見た途端、アンの視界が歪む。
「あの、私……ごめんなさい！」
「おい！？」
気が付けば、アンは階段を駆け上がり自らの部屋に駆け込んでいた。
後ろ手でドアを閉め、動悸のする胸を押さえる。
「うっう……」
しかし、動悸が納まると共に、自分でも正体の分からない涙が、ぽろぽろと目から零れ落ちてきた。
良が部屋の前まで追いかけてくる音がする。
彼はしばらく扉の前に立っていたが、何も言わず、やがて階下へと降りていく。
アンはベッドに飛び込むと、うつ伏せのまま涙を枕に吸わせ続けたのであった。

VS過去

「アンお姉ちゃん」
声がかかったのは、それから二時間程経った後だった。
いつの間にか眠っていたアンは、控えめなノックとその声で目を覚ました。
「入っても良い？」
「あ、はい……どうぞ」
起き上がり、ベッドに腰をかけなおした彼女は、少し躊躇したが、そう答える。
ベッドでもグルグルと考えていたのだが、自分の気持ちが自分の事なのにまるで分からず、とにかく誰かと話したい気分になっていた。
遠慮がちに扉が開かれる。
対面した舞は、アンの顔を見て痛ましそうに顔を歪めた。
泣きながら寝た所為だろうか。アンはごしごしと顔を拭う。
「ごめんね、甲斐性の無いお兄ちゃんで」
力なく、それでも悪戯っぽく笑いながら、舞はそう言った。
「甲斐性、ですか？」
「うん、こういう時は男の子がバァンと何とかするべきでしょう」
などと言いながら、彼女は部屋に入ってくる。
「い、いえ、良さんは私の為に、お母様に頼んでまでくれているのに……私ったら」
良が自分を庇い、この家にしばらく居させようとしてくれている。それはとても喜ばしい事のはずだった。
しかし、彼のあの瞳を見た途端、何故だかその場に居られない気持ちになったのだ。
いや、彼が電話をしていた時から、それよりもっと前から、自分は同じ気持ちを抱いていた気がする。

その時の、そして今の自分に渦巻く感情が何なのか、アンには未だに分からないでいた。
「うちの両親ね。今両方とも別々に暮らしてるの」
「え？」
舞の声で、意識が現実へと戻る。
聞き返したアンの横に、ベッドを軋ませながら舞が座った。
「原因はお父さんの浮気。それでお母さんが出て行って、お父さんは今その浮気した女の人の所にいるの」
その顔には自虐的な笑みが浮かんでいる。
彼女の告白に何も言えず、アンは黙って話を聞いた。
「しかも、三回目。ひどい話だよね」
彼女達の口から両親の話題が出ないのはそういう事だったのか。アンは遅まきながらに納得する。
ふっと、舞の目が遠くを見た。
「……二回目の時、お兄ちゃんが一生懸命説得したの。皆が一緒に居られるように」
「良さんが……」
「でも、三回目が起こった。それでお母さんが辛い思いをして、私達も振り回されて、お兄ちゃんはそれでいっぱい悩んで、怖くなっちゃったみたい」
「怖、く？」
アンの脳裏に、先程の良の表情が思い出される。
そうだ、あの時の彼は、酷く怯えていなかったか。
「人に親切にしたり、自分で良かれと思った行動をするのが。自分があの時動かなければ、皆が余計に傷つくことはなかったんだって思ったんじゃないかな。だからお兄ちゃんは親切とか優しいとか言われるのを嫌がるの」
本当はもっと分かりやすく優しいんだよ。舞は笑顔で補足した。
そうだったのか。アンは悲しくなって息を吐く。
だから彼は、魔王を名乗りぶっきらぼうな態度を取っていたのだ。

「で、もうめんどくさくなって、ここから逃げよう！　って二人で決めて、どこが良いって相談したら、異世界って話になって」
「お、お二人らしいですね」
「まぁ、私達も本気で行けるなんて思ってなかったんだけどね。でも、これが失敗したら、どこかに逃げるなんてバカなこと言うのやめようとは、決めてた」
楽しそうに述懐する舞。しかしその言葉の端々から、当時の彼らが如何に追い詰められていたかが伝わってきた。
「でも、アンお姉ちゃんが、ついでにキクが来てくれた。お兄ちゃんがずっとやっていいのか悩んでいた親切に、アンお姉ちゃんは全部ありがとうを言って、喜んでくれた。おかげでお兄ちゃんも段々、優しいお兄ちゃんに戻ってきて」
「そんな、私は普通の事をしただけで……」
「それが、お兄ちゃんには一番嬉しい事だったんだよ」
言って、舞がアンに笑いかける。
そう言えば彼女は、アンが来てから良がよく笑うようになったなんて言っていた。
笑顔、か。彼のそれを思い浮かべてみると、意外と沢山の場面が思い出される。
傲慢に、不遜に、悪戯少年のように、そして優しく、確かに彼は笑っていた。
そうやって思い出を一つ一つ並べていき、アンはようやく自らの気持ちに気づいた。
「……私、やっぱり帰ろうと思います」
そうして、一つの結論が出る。
「迷惑かけてるから、なんて思ってるなら気にしないで良いんだよ？」
「そうじゃ、ないんです。私も、本当はずっとここに居たい。でも……」
顔を覗き込む舞に、体ごと向き直り真剣な瞳で彼女を見つめる。

「きっと、今無理にここで暮らそうとすれば、良さんはずっとあの顔で暮らさなきゃいけなくなります。両親に負い目を作って、私にもきっと、すまなそうな目を向けて」
息を吸う。ようやく、あの時自分が逃げ出した理由が、アンにも理解できた。
あれは、体がもうここには居られないと悟ったからこそだったのだ。
「そんなの嫌です。私も笑ってる良さんが好きですから」
「そっか」
首を傾げ笑うと、舞もそう言って笑い返した。
自分も今、こんな風に切なげな笑顔をしているのだろうか。
――それからアンは、ベッドから立ち上がり階下の良に声をかけた。
「帰ります」と告げると、背中を向けた彼は「そうか」とだけ言い立ち上がる。
こうして、アンの帰還が始まった。

VSドラゴン

その夜は満月だった。
明かりは月と燭台の上の蝋燭のみ。
「そこ、穴が開いてるから気をつけろよ」
良に注意されながら、和室の中に入る。事情を分かっているのか分かっていないのか、キクもそれに続いた。
そして儀式が始まる。
焦げた黒マントを羽織った良と舞が、畳の上にチョークで魔法陣を描いていく。
その間二人は喋らず、アンも無言を貫いていた。
やがて魔法陣が完成すると、今度は魔法陣の外周である円に良が溶けた蝋を垂らし、一本一本蝋燭を固定していく。
続いて舞と良が魔法陣の脇に立ち、呪文の詠唱が始まった。
「ラ・マセルダタナル」
「ラーナ・エンファウルト」
交互に呪文を唱えていく二人。
そしてそれが終わると、舞が癒樹の印章に口付けをし、良に手渡すと一歩下がった。
それを受け取り頷くと、良が印章を両手に持ったまま足を高く上げ、その姿勢で息を吸い静止する。
数秒の間。
そして。
「見えた！」
彼は突如として叫ぶと、手に持った印章を思い切り投げた！
ガシャーン！　大きな音が鳴る。
アンはガラスが割れたのかと勘違いしたのだが、そうではない。
なんと、魔法陣の上辺り、何もない中空に亀裂が走っていた。
その裂け目から、オレンジ色の光が迸っている。

アンがこの世界に来る時に見た、夕暮れ時のようなあのオレンジ色の光だ。
「俺はこれを、トワイライトゲートと呼んでいる」
言いながら、良がその亀裂に近づき、謝るように手刀で叩いた。
パキパキパキ、パリン。
音がし、亀裂が更に広がったかと思えば、空間がゆで卵の殻のようにポロポロとはがれ、真円の穴となる。
「黄昏門……」
「まぁ、別にそれでも良いが」
聞こえた通りにアンが呟くと、振り返った良が怪訝な顔をする。何かおかしな事を言っただろうか。
アンが首を傾げていると、良は顔をゲートに向けなおし、呟く、
「では、入るか」
そのまま、彼は足をゲートの淵にかけ、入ろうとした。
「え、あ、ちょちょ！」
突然の良の行動に焦ったアンは、慌てて彼のマントを掴み、引っ張った。
「あだっ！」
片足を上げた姿勢だった良が、バランスを崩し床に尻餅をつく。
「ちょ、ちょっと、待ってください！」
その間にアンは両手を広げ、彼から庇うように良とゲートの間に割り込んだ。
「い、今頭打ったぞ……何をするのだ」
良が涙目で何か呟いているが、混乱したアンには聞こえない。
え、何で良まで一緒に来ようとするの？
あぁそうだ。自分だけが異世界に帰るのだと伝えたのは、舞にだけだったとアンは思い出し、慌てて良を説得する事にした。
「良さんと舞さんがいなくなったら、きっとご両親は悲しみます。ですから……」
「あ、あぁ、それなら問題ない。舞は置いていくから」

それに対し、良が立ち上がりながらあっさりと告げる。
「えぇ！？　それも聞いてないよお兄ちゃん！」
「何だかんだで危険な世界ではあるからな。なぁに、魔王職が安定したら里帰りするから安心しろ」
「や、やだよ！　私がどれだけお兄ちゃんに依存してるか分かってないでしょう！？」
「何、兄離れなど意外とあっさりできるものだ」
「がんばってもできなかったもん！　そんな事言うなら私がアンお姉ちゃんと行く！」
「あ、あのぅ、お二人とも……」
え、何この流れ。言い争いをする二人に、アンは恐る恐る声をかけた。
キッと、二人の視線がこちらに向く。
が、その顔が、次第に驚愕に染まっていった。
「え？　ど、どうしたんです？」
「ア、アンお姉ちゃん後ろ！」
「ぐっ！」
舞が叫び、良がアンの手を取り強引に引いた。
振り回されたアンはバランスを崩し、先程の良のように尻餅をついた。
いや、ついてはいない。彼女の尻は、初日にキクが開けた穴にすっぽりと嵌っていた。
「な、何するんですか！？」
もう少し自分が小尻だったら下に落ちていた所だ。
先ほど自分がした事も忘れ、アンが抗議しながら良を見上げると、そこには信じられない光景があった。
「グオォォォォォ！」
ゲートから飛び出したその顔が、大きな咆哮を上げる。
猛禽類のような嘴。しかしその中に生えた肉食獣の牙。真っ赤な鱗で覆われた肌。縦に裂けた瞳孔。

その頭自体が、前に立っている良と同じぐらいの大きさを持っている。
それは、ドラゴンの首だった。だがキクとは比べ物にならないほど大型である。
何で、今ここからこんなものが。
混乱している間にも、アンを助け体勢を崩している良に、ドラゴンの首が一メートルほど伸び、襲い掛かる。
「良さん！」
アンが叫ぶと同時に、目の前を黒い影が通り過ぎる。
「グケェ！」
「ガフッ！」
それが勢いよくドラゴンの下顎を突き上げ、間一髪良を助けた。
「キク！」
舞が叫び声を上げる。黒い影は、キクだった。着地した彼女は、威嚇するように吼える。
その隙に、良が這うようにして、こちらに逃れてくた。
「おい、何やってるんだ！　逃げるぞ！」
「お、お尻が嵌っちゃって……」
「またかよこの洋ナシ体型！」
罵りながら、良が手を差し出す。それを取って尻を抜こうとするが、存外ジャストフィットしてしまっており簡単には抜け出せない。
「な、何でドラゴンが！？」
「俺達が勘違いしてただけで、ゲートの先は毎回違う場所なんだろ！」
なるほど。村にドラゴンが出現した訳ではないのかとほっと息を吐くアン。
しかしすぐに、そんな場合ではない事に気付く。
良の後ろではキクが応戦しているが、首だけとはいえやはり成竜には勝てないらしく、何度も跳ね飛ばされ傷を増やしている。
そして、キクが奮戦しても竜にはブレスがある。それを吐かれれ

ば、この部屋、いや、家自体が一瞬で燃え上がるはずだ。
「お、お兄ちゃん達、早く！」
部屋の入り口まで退避した舞が叫ぶ。彼女も一歩二歩とこちらに近づこうと足を動かすのだが、竜が暴れる所為で動けないようだ。
「良さん、私は良いですから逃げてください！」
たまらず、アンは叫んだ。
竜同士が戦うあの間を抜けるのは難しいかもしれないが、こうして自分を引っ張り出しているよりはまだ生存の可能性がある。
「聞けるかっつぅの！」
しかし彼は、それを聞き入れようとはしない。アンが離したその手を、逆に掴んで更に強く引っ張り上げようとする。
「迷惑です！　親切の押し付けです！　偽善です！」
「聞こえねぇ！　聞こえねぇ！　聞こえねぇ！」
アンは舞に教えてもらった良が嫌がる言葉で必死に罵倒するが、彼は一向にその手を離そうとしないどころか、より強く握り締め、叫んだ。
「俺は魔王だ！　お前の嫌がることなんて率先してやってやるわ！　つうか親切？　思い上がるな！　俺はお前に親切にした事なんてねぇ！　あれは、俺が全部自分でやりたかった事だ！　あと笑顔がす、す、好きとか言われて喜ぶ魔王がいるか！」
「え、聞いてたんですか！？」
「部屋開けっ放しにしてれば聞こえるわ！」
完全にぶちぎれている。そして逆切れしている。しかし、吹っ切れている。
そこにはあの、気弱な表情を見せていた彼はもういない。
その彼が懸命に引っ張ってくれていると言うのに、自分の尻は抜ける気配がない。
相当ぴったりと嵌っているのだ。悟った良が、強く握っていた手を離した。
ようやく諦めてくれたか。アンはほっと息をつきかけたが、それ

が自らの思い違いであることにすぐ気付く。
背後に視線を向けた良の横顔が、先程より更に強い決意に満ち溢れていたからだ。
そして彼はその視線を、竜ではなくその下に向けている。
「……こうなったら最後の手段だ。あの蝋燭を消す」
先程とは打って変わった静かな調子で、良が宣言する。
彼の言葉に、アンはハッとなった。そうか、確かアンが初めてこの世界に来た時にも、あの蝋燭が消えると同時にゲートが消失した。
ならば竜が挟まっている状態でそうなれば……。
「それであいつの首チョンパだ」
首をかき切る動作をする良。本当にそんな風に上手く行くだろうか。そもそも、ドラゴン同士が戦いあう、あの危険地帯をどうやって抜けるのか。
いや、不安に思っても仕方ない。
彼はもう、決めてしまったのだ。ならば。
「お前の帰郷は遅れるがな。まぁ……」
「魔王にでも攫われたと思って諦めます」
覚悟を決め答えると、良がニヤリと笑った。
そして、前方へと走り出す。
それに気付いたドラゴンが彼に頭を向けた。が。
「ギャアアアア！」
そこでキクが竜に酸を吐きかけた。それが目に直撃し、ドラゴンが暴れる。
しかしその動きに巻き込まれ、キクが壁に叩きつけられた。
まるで暴風雨のようにしなる首の中に、良は飛び込んでいく。
「のぉりゃぁ！」
スライディングでゲートとドラゴンの下を間一髪潜り抜けると、彼はその勢いでゴロゴロと転がり、蝋燭をなぎ倒していった。
しかし。
「良さん危ない！」

寝転がった良に、早くも回復した竜が襲い掛かる。
それを更に転がってかわしてから、良は膝立ちになった。
「くそ、あと一本……！」
良が歯噛みをする。蝋燭があと一本、倒れずに残っていた。
しかしそれに手を伸ばす暇もなく、竜がゲートを回り込むように首を伸ばし、襲い掛かってくる。そこへ――。
「デスファイヤー！」
呪文が響く。
良とドラゴンの間に突如火球が出現した。
「舞ちゃん！」
「ハァイ！」
それを発生させた舞が、アンの呼びかけに軽く手を上げる。
火球はドラゴンの魔法無効化によって即座に破裂し、火の粉を撒き散らす。
しかし。
「イグニッション！」
その時には、良が手を突き出し、魔法を完成させていた。
ドラゴンの魔法無効化は自らに害が及ぶ魔法を無効化する。しかし、自らに害意の及ばない魔法であれば――。
「やった！」
地面に張り付いていた蝋燭が、急にその接着力を無くし、地面に倒れた。
その勢いで、蝋燭の火が消える。
「よし！」
ゲートに亀裂が走る。
そして。
倒れた蝋燭、そこにデスファイヤーの火の粉が降り注ぎ、再び着火した。
「えぇーーー！！」
「なんだと！？」

悲鳴と共に、止まるゲートの崩壊。
茫然自失といった様子の良に、ドラゴンが大きく口を開ける。
もうダメだ。アンが諦めかけたその時。
「グギャアアアアアアアアア！」
ドラゴンが、開いた口の中から特大の悲鳴を上げた。
「え？」
何が起こったか分からず、一同は唖然とした。
やがて竜は悲鳴を途切れさせると、ドスンとその首を地面に落とす。
慌てて避ける良の足元で、竜の口からドクドクと血が流れた。
「ど、どうなったのだ？　俺の魔法が即死魔法にでもクラスアップしたか？」
「滑る魔法はどう成長しても即死魔法にはならないと思うよ……」
言い合いながら、兄妹がドラゴンに近づき様子を伺う。
キクもどうやら無事なようで、体をプルプル振ってから良の元へ歩いていく。
アンもようやく穴から尻を抜く事に成功し、四つんばいになりながら竜へと寄った。
ゲートはひびが入りながらも、まだ開いている。
どうやら首が絞まった訳ではないらしい。
『おーーい！　そっちに誰か居ますかー！』
不意に、声が響いた。
一様にビクリと体を震わせるアン達。
「い、今、向こう側から話しかけられた？」
舞が恐る恐る周囲に尋ねる。
アンにも、確かにそう聞こえた。ゲートの先に人がいる。それならば、もしや。
『すみませーん。誰か居ますかー？』
「は、はい！　貴方がドラゴンを倒してくれたんですか！？」
急に力を失ったドラゴン。それを察するに、そうとしか考えられ

ない。
『そうよー。コイツを退治しに来たんだけど、何か尻向けたまま穴に首突っ込んでるんだもん。助かったわ』
アンが尋ねると、相手はそれを肯定した。
「ううん、こちらこそ助かりました！」
『なるほど、お互い様って事ね。そんじゃ野郎どもー！　とりあえずコイツを穴から引き抜くわよ！』
『無理だって姐さん』
『首を切り落とした方が良いんじゃないか？』
あちら側にも複数人いるらしい。女性と思われる声の他に男性の声が聞こえる。
『なるほど、よっと』
女性が何かしたらしい、穴の向こうから轟音が響き、どさりと竜の首の根元がこちら側に落ちてきた。
一斉に飛びのく良達。
「お、お前は先程から何を話しているのだ！？」
「え、その、皆さんには聞こえないんですか？」
「聞こえるけど、外国語みたいでどういう意味か分からないの。アンさんの言葉は分かるんだけど」
「そうか、相手方はゲートをくぐっていない所為で、翻訳魔法がかかっていないのだな」
首を捻るアンに、良が解説する。なるほど、この穴を通らない限り異界の言葉は分からないのか。
アンが納得している間にも、反対側ではドラゴン殺しの冒険者達が話し合っている。
『さっすが姐さん』
『その姐さんっての止めなさいよ。アンタより一個上なだけでしょ』
アンは何故か、その声に聞き覚えがあった。
『へへ、すみませんね、ルナ＝ノンマルトンさん』
そして、その名前を聞いた途端、彼女は跳ね上がった。

「お姉ちゃん！」
「『お姉ちゃん！？」』
アンの叫びに、その場にいる全員が驚きの声を上げる。
しかし、驚いているのはアンも同じ事だった。
『お姉ちゃんって、もしかして……アン！　あんたアンなの！？』
「やっぱりお姉ちゃんだ！　久しぶり！」
あちら側からは見えないというのに、思わず手を振ってしまうアン。
そんな彼女に、良が目を見開きながら尋ねる。
「お、お姉ちゃんって、あの露出狂の姉か？」
「お姉ちゃんは痴女じゃありません！」
『痴女……』
『まぁ確かに痴女だわな』
アンは否定したが、向こうでは納得の声が上がっている。
『アン！　ちょっとアンタそっちで何話してんの！？　アンタらも同意すんな！　え、いや、ていうか何でそんな所に！？』
ゲートの向こうでは姉の慌てる声。あぁ、やっぱり痴女と思われてる……じゃなくて姉の声だ。確認したアンの胸に、何かがこみ上げてきた。
『ていうか、皆心配してたわよ』
「皆は嘘でしょう」
『……少なくともお父さんは心配してる。あと私も』
アンの問いに、姉は誠実に、真剣な声音で答えた。
それはそうだ。実は皆が自分を大切に思ってたなんて、そう都合の良い話は無い。
でも、一年に一回ほどしか帰ってこない姉も、普段何を考えているか分からない父も、彼らなりに自分を心配してくれていたらしい。
アンは、それに気づけてはいなかった。
きっと、あちら側にはまだまだアンの気づかなかった事、見ようとしなかった事があるだろう。

「向こうは、何と言っているんだ？」
恐る恐るといった顔で、良が問いかける。
「お姉ちゃん、それとお父さんが心配してくれたみたいです」
答えると、彼は顔をしかめた。
勢いで異世界に行くと言ったが、彼とて両親をこのままにしておくのを良しとしている訳ではないだろう。
それに、妹を危険な世界に連れていく事も、しかしこの場所に残してしまう事にもためらいを持っている。
だって彼は、優しいのだから。
「やっぱり私、一人で帰ります。攫われるのは、また今度という事で」
なるべく平静を装って、アンはそう告げた、
良、そしてその後ろにいる舞が、目を見開く。
「良さんがしてくれた親切は、全部、全部嬉しかったです。この世界に呼んでくれた事も、色んな物の使い方や、泳ぐ方法を教えてくれた事も。それに、私をここに留まらせようとしてくれた事も、全部」
自らがする親切を偽善だと恐れ、迷っていた良。
しかしそれに関しては、もう大丈夫だろう。おせっかいでも何でも、彼はきっと、それをせずにはいられないと自分で気付いたはずだから。
「でも、だからこそ私、元の世界で試してみたいんです。魔力が無いからとか、諦めていた事を色々。そうして、色んな事から逃げ出したっていう負い目が無くなって初めて、良さんと対等に向き合える気がするんです」
アンが素直な胸の内を吐露すると、良が慌てて口を開いた。
「だ、だけどお前、このゲートが閉じたら次は何時まともな場所に繋がるか分からないんだぞ！？　お前のいる場所の近くなんて到底……！」
「それでも、です」

狼狽し、早口で言い募る良を、アンはまっすぐに見つめ、そう言い切った。
それでも、今帰らないという選択は、アンにはできなかった。
家族が待っている。それ以上に、今また彼らの優しさに浸ってしまえば、もう抜け出せない気がしたからだ。
ゲートがピキピキと音を立てる。
どうやら、本格的に時間切れが近いようだった。
良は、何も言わない。拳を握り締め下を向いている。
アンを引っ張り出す事ができず、結局彼女の姉に助けてもらう形になったのが、彼の心に響いているのかもしれない。
舞も胸の前に手を当てたまま何かを堪えるような顔をしている。
キクも帰るなら今なのだが、良の足元から離れようとしない。自分をまっすぐ見つめる瞳から、彼女には帰る気が無いのだと察せられた。
彼女とは別の選択をした同じ世界の友に微笑んで、アンは彼らに背中を向けた。
深呼吸をして、ゲートに向き合う。
「いつか、色々な問題が解決して、もし、それでも良さんがこちらに来たかったら……」
迎えに来て下さい。そうは、言えなかった。
それをするには、あまりにも乗り越えるべき障害が多すぎる。
結局何も言わずにアンはゲートを潜ろうとした。
「……アン！」
そんな彼女の名前を、良が初めて呼んだ。振り返らず、アンは動きを止める。
「前にも言ったが、俺は、嫌いな物を無理に好きになる必要はないと思っている」
いつか、良と二人きりで話した時、そんな会話を交わした事がある。
確かニンジンが好き嫌いの話だったか。

「嫌いな物あって、それを避けられない時自分を曲げるなど愚かな事だ。そんな事をするぐらいなら、そいつとぶつかって、相手のほうを曲げてしまえば良い」
「そんな事……」
彼らしい意見だ。しかし、なんて無茶だろう。彼女が今向き合おうとしているのは、世界なのだ。そんなものに、自分が……。
「まぁ、お前のような一般異世界人には難しかろうな」
頭を垂れた彼女の後姿に、良がいつもの無愛想な言い方で告げる。
最後までそんな言い方をしなくても。アンは思わず振り返った。
すると、彼は笑っていた。
「だから、俺がお前の嫌いな世界を滅ぼしてやる。絶対にだ」
魔王というよりは悪戯好きの少年のような笑顔で、良は笑った。
一瞬、その顔に見惚れてから、きっと彼ならそれをやってしまうだろう。アンはそう感じる。
大したおせっかいだ。おせっかいで世界を滅ぼすなどという者は、きっと人間にも魔王にも他にいないだろう。
「私、私も絶対に行くから！」
後ろで舞が叫ぶ。いつも余裕を見せていた彼女が、その顔を涙でぐちゃぐちゃに汚していた。彼女に大きく頷き、アンは良に視線を向けなおした。
「それより先にきっと、世界を好きになって見せます」
宣言し、無理に笑って見せる。傲慢な笑顔と、涙でぐしゃぐしゃな顔。その二つを瞳に焼き付け、アンは消えそうになるゲートに飛び込んだ。

VS魔王

ゲートから飛び出したアンが見たのは、巨大な竜の胴体とその周囲にいる冒険者達、そして以前よりもさらに露出の増えた姉だった。
彼女達に案内され、竜の棲家であった火山から脱出したアンは、太陽に明るさに目を細める。
それから彼女は、仲間と一旦別れた姉に連れられ、生まれ育った村へと戻っていた。
「え、じゃぁお姉ちゃん達って、魔王を倒す為に旅をしてるの！？」
「まぁ、この時期の冒険者なら最終目標は皆そうでしょ」
驚きの声を上げるアンに、並んで歩いている姉が大げさねぇと苦笑する。
しかし、つい先程まで魔王見習いの住居で暮らしていたアンとしては複雑な気分だ。
そこでふと、彼女は思いつき、尋ねてみた。
「そういえば、魔王ってどんな人なの？」
「どんな人って……いやー、私もよく知らないけど」
問われ、姉は唇に指を当てながら考えるポーズを取り、それから彼女は魔王について語りだした。
「一番有名な事と言えば、史上三人目の竜を従えた魔王って事ね」
「竜を！？」
それが本当だとしたら、大変な事だ。
何せ前二回は世界がとんでもない事になっているのだから。
しかし、魔王が出現したという噂が出てからもう三ヶ月は経っている。
それなのに、アンはその魔王がどこを征服したとかどこを襲ったとかいう話は一度も聞いた事がなかった。
彼女の不思議そうな顔で察したらしい。姉が大きく頷いた。
「うん、でも魔王はまだ大掛かりな侵攻はしてない。それどころか

北の大陸に篭って妙な事をやってるらしいわ」
「みょ、妙な事って？」
「そこいらの町で魔力を使わない機械を売り捌いてるらしいの。それがやたら便利らしくて、魔王謹製って分かってても買う人間が後を絶たないぐらいよ」
魔力を使わない機械……そうか、そういえばこっちではそれが普通なんだ。
まだ感覚が戻りきっていないアンは、ぼんやり考えた。
「それって悪いことなのかな？」
そして、思わず口にする。
「魔王の作ったもんなんて、何が仕込まれてるか分からないじゃない。後は経済侵略だとか、魔法使いの地位を脅かすとか、人類を堕落させるとか、まぁ色々世界を混乱させてるみたい」
魔力孔が無いというアンの事情を知っている姉は、それに対し多少言い辛そうに答えた。
アンも憂鬱な顔をしているが、　その理由は姉の言葉でこちらの世界ではあの冷蔵庫やレンジなど便利な家電を使えないのだと思い出した所為である。
なるほど、難しいものだ。　あれぐらい便利なら、確かに自分も買ってしまうかも。
「ちなみに、どんな物を売ってるの？」
「えーっと、食べ物を冷やして保存できる機械とか、逆に温めてくれる機械とか」
自分が先ほどまでイメージしていた物が姉の口から漏れ、アンは驚いた。
それって、あちらの世界にあった物じゃ……。
「あぁ、後は機械じゃないけど、着けるだけで胸が大きくなる胸当てとか」
そんな物あったら今すぐ着けるよねー。などと姉が豪快に笑う中、アンは自らの胸を押さえる。

そこには舞に選んでもらい、良に買ってもらった、そういう評判の胸当てが着けられている。
……竜をも従え、見た事もない品物を売りつける。
いやいや、まさか。
だって魔王が出現したのは、自分があちらに行く前だもの。辻褄が合わない。
アンがバカな考えを振り払っていると、今度は姉がアンに問いかけた。
「そういえばアンタ、家を出てから一週間どうしてたの？」
「一週間？」
自分が異世界に召喚されたのは、一ヶ月ほど前のはずだ。
姉は何を言っているのだろうとアンは首を捻る。
捻って、捻って、それから彼女は気が付いた。
周りが、明るい。
良達と儀式を行ったのは夜であったはずなのに、自分が今いるこの世界では太陽が真上にある。
召喚ゲートの先は、同じ場所とは限らないと良は言った。
ならば、その先が同じ時間であるとも限らないのではないだろうか。
「あの、お姉ちゃん。魔王ってなんて名前なんですか？」
「え、魔王ヘイヘイ」
姉の言葉に、アンは口をあんぐりと開けた。
それから、深く頷く。
なるほど、決まりだ。確定だ。つまりはそういう事なのだ。
彼、魔王はアンより遅れ、しかし彼女を先回りし、魔力至上のこの世界を滅ぼしに来たのだ。
なんて盛大なおせっかいだろう。おせっかい魔王だ。
でもそれはきっと私の為に……。
くやしいのだか嬉しいのだか、自分でも分からず身もだえするアンをどう思ったのか。

隣を歩く姉は指を立て、彼女に注意した。
「あ、でもアンタ。いくら便利そうでも魔王の作った機械が欲しいなんてダメだからね。魔王は北の大地でハーレム作ってるって噂なんだから」
「ハ、ハーレム！？」
彼女の言葉に、アンの顔が驚愕に染まる。
え、だって彼って私の為にこの世界に来たんじゃ……。
「そうよ。魔物だろうがエルフだろうが女騎士だろうが竜だろうが妹だろうが関係無しって話なんだから。きっと儲けた金でウハウハ楽しそうに暮らしてるに違いないわね……って、どうしたのアン？」
わなわなと震えるアンを、姉が不思議そうに見る。
アンはその彼女に、なるべく穏やかに頼んだ。
「お姉ちゃん、村に帰ってしばらくしたら、また寄ってくれないかな？　行きたい場所があるの」
「え、珍しいね。良いけど、どこ行くの？」
「魔王退治です」
帰ってきた時とは別の意味で無理やり笑顔を作ったアンに、姉が二三歩下がる。
そうだ、今なら魔王だって倒せよう。この力は、全て彼にもらったのだ。
返しに行かなきゃ。小さな問題を片付けたなら、すぐに。
「待ってろよーーー！」
握り拳を突き出したアンは、思い切り叫んだ。
村娘アンの魔王退治は、こうして始まったのであった。

魔王の家の村娘Ａ　了

VS魔王（後書き）

紹介文でも書かせていただきましたが、このお話は自サイト（プロフィール参照）で連載していた創作物を、今回の投稿で手直しさせていただいたものです。

ちょこちょこっといじるだけのつもりが、三日がかりの作業に加えて調子に乗って一話増やしたりと、何とも本末転倒な事になってしまいました。

他のお話も時間があれば改訂して載せるつもりですので、よろしければまたお付き合いください。

感想、レビュー等もお待ちしております。短くても構いませんので一言書き残していただけると、作者の力になります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6193z/

魔王の家の村娘Ａ

2011年12月22日19時53分発行